

## 【第二章】 二人の姫王（鏡姫王と額田姫王）

### （1）鏡姫王（かがみのひめきみ）

#### ①鏡姫王の父と祖父

『紀』「天武紀」に記される鏡姫王と類似する尊称に『万葉集』の鏡王女があり、『歌経かきよう標式』（奈良時代の歌論書）・『興福寺縁起』（平安時代前期）・『延喜式』（平安時代中期）には鏡女王とある。それらの名称に対する疑義はあるが、本書においてはそれらを同一人物とみなして論を進める。

鏡姫王を額田姫王の姉とみなしたのは本居宣長（『玉勝間』）が最初で、『紀』に「鏡姫王」とあるから『万葉集』に記される「鏡王女」は誤りで、「鏡女王」が正しいとした。賀茂真淵もそれを受けて『萬葉考』で、もっと明確に、古代にも江戸時代にも「王女」という語が無かったからそれは鏡女王の誤りだとした。

偉人たちのその部分に対する解釈は、万葉集の詠み人を他書と同じ基準で読もうとしたために起こった錯覚である。

鏡姫王も鏡女王も天皇の末裔を示す「かがみのひめ（の）きみ」だが、鏡王女は同意の別語である。それは「鏡の王女」と読むのではなく「鏡王の女むすめ」であり、そうとしか読めない語である。従って、それは鏡姫王の父が鏡王だったことを示している。

そして、『延喜式』（諸陵式）には「押坂ノ墓 鏡女王在大和國城上郡押坂陵域内東西无守戸」と記されている。その東西は東南の誤りで无は無の意味であるが、鏡女王が舒明天皇陵のはずれの谷合とはいえその陵域内に葬られた記録は、年代的にも舒明天皇（五九三年の孫だったことを明示している）。

舒明天皇の押坂陵域には母の田村皇女（糠手姫皇女）と大伴皇女（欽明天皇と堅塩媛の皇女も葬られているが、本論吉備姫王の項で述べた通り、吉備姫王の墓が祖父欽明天皇の陵域内、南西部の隣接地にあり（『延喜式』「檜隅ノ墓 吉備姫王在大和国城上押坂陵域東南無守戸」）、また大田皇女の墓（越塚御門古墳）が祖母斉明天皇陵（牽牛子塚古墳）の南東、わずか二十メートルの裾部にあった（『天智紀』「以皇孫大田皇女、葬於陵前之墓」）ことは、崩御した天皇を薨去した孫娘に守らせるという意識があったものと理解できる。

『紀』斉明七年正月条に「大田姫皇女」の記載があり、姫皇女の他の尊称例には糠手姫

皇女や石姫皇女等々があり、「姫」を付けられる皇女と付けられない皇女との違いについては別途検討を要するものと思われるが、天皇二世の姫皇女と本論では三世だったと推定する姫王（姫女王）には明確な区別がなされていた、と認められるだろう。

『紀』（天武紀）に記される鏡姫王は、鏡姫王が薨じる前日（六八三年）に天皇がその家を訪れて見舞ったという箇所に見れる。その場所は恐らく鎌足の居所で寺も建てられていた、藤原の厩坂の館ではなかったかと思われる。

天皇がみずから足を運んでの異例の見舞いをした一つの理由は、鎌足と鏡姫王との間の娘、氷上娘ひかみのいらつめと五百重娘いおえのいらつめが天皇の夫人になっていたことに拠るのだろう。しかし、天武天皇が他の臣下の妻を見舞った記録は無い。従って、天皇にとって別の重要な理由があったと考えられる余地が生まれる。

鏡女王を舒明天皇の陵域に葬ると決めたのは、天武天皇だったはずである。従ってその見舞いの目的の一つが、鏡姫王が薨じたら夫だった鎌足の墓と離して、「皇族に戻して舒明天皇の孫娘として葬る」ことを伝えることであつたようにも思われるのである。

鏡女王のその墓地と周辺は談山神社が譲り受けて「鏡女王押坂墓」としたのだが、談山神社は定恵じやうゑ（不比等の兄）が六六九年に薨じた父鎌足を祀るために、六七八年に十三重塔を建てたのが始まりだと伝える。

しかし、本項⑤で述べるが、定恵は孝徳天皇が鎌足に下賜した侍女か采女の子で、中大兄皇子の企てで僧籍に入れられて遣唐使として国から追い出された真人まひとであり、六六五年に帰国したが三ヶ月後に暗殺されている。これに関する考証は省くが、鎌足の神像を祀る談山神社の神堂が創建されたのは七〇一年で、その年は不比等が大宝律令を完成して大納言になった大宝元年である。

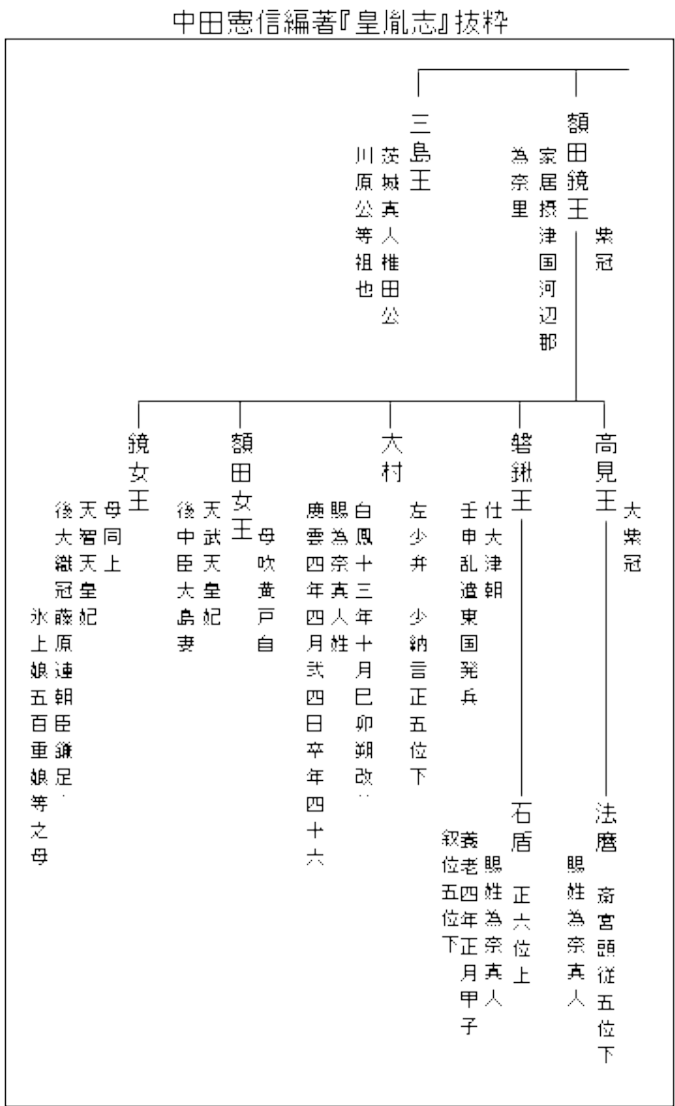
ここから、天武天皇が六八〇年に創建した妙楽寺を不比等が多武峰寺に改称して、同時に、鎌足が中大兄皇子と談山かたらいやまで「乙巳の変」の密談をしたという話を取り込むために、多武峰寺の周辺を開いて「鎌足を祀るための談山神社」を開いた、というのが実際の経緯ではなかったかと考えられる。

蛇足だが、鎌足と中大兄皇子が通つたとされる僧請安しんせうわんの塾は、飛鳥川上流の南淵みなみぞう（明日香村稻渚いながし）付近にあつた。その集落の高台（談山）に鎌足を祭神とする寂れた「談山神社」が残っており、その小さな祠ほこらの裏手に改葬されたとされる「南淵先生墓せんしやうぼ」もある。こちらが逸話の舞台になった談山だろう。

しかし、鏡王は舒明天皇の子では無かった。  
 ——これが鏡姫王の母を推理する重要な鍵であり、複数いたであろう鏡王の女たちの中でなぜ鏡王女と言えれば鏡姫王を指すようになったのかを考える鍵である。  
 それを推理する前に、鏡王の系譜とその子女について考えてみたい。

② (額田) 鏡王とその子たち

鏡王とその家族を考察するために参考になる史料がある。



これは、明治期の中田憲信が記した『皇胤志』の系図画像の一部で、当代系図研究の第一人者で『古代氏族系譜集成』を編纂された宝賀寿男先生から筆者にご提供戴いた部分を文字データに打ち直したものである。

但し、宝賀氏からは併せて「(それは) 鈴木真年が採取した「為奈真人姓」系図(『百家系図』巻36に所収)の原典記載順どおりに転記しただけだと思ふ」との重要な指摘を載している。

これらについては宝賀氏のご承諾を得た上での掲載であることをお伝えすると共に、明治初期から明治初期の系図研究者として高い評価を受ける鈴木真年が収集してきたであろうその系図は(男)子を先に女(子)を後にした書き方になっており、古い時代のものであることは間違いないだろう。また、『百家系図』を元に諸人物の注釈を加えたものが『皇胤志』であろうと宝賀氏は解釈されている、と筆者は理解している。

但し、鏡女王は額田女王の異母姉とみるのが通説で、鏡女王が記された順位に疑問があ

り、筆者は鏡女王が五百重娘の母とされたことにも疑問を感じているが、鈴木はそこに疑問が生じることを十分に承知の上で、古史料を正確に、あえて伝えられていた通りに書き写したものと考える。

また、摂津国河辺郡為奈郷（現尼崎市北東部の猪名寺周辺から伊丹市南部）を本拠地にした威奈鏡王に繋がる宣化天皇の皇子については異説がある。『記』（古事記）がそれを恵波王はおうとしたのに対して『紀』は上殖葉皇子かみつえはとして、嵯峨天皇の勅命によって編纂された『新撰姓氏録』（八一五年）の皇別氏族では「為奈真人 宣化天皇皇子火焰王ほのおのきみ之後也續日本紀合」（原文ママ）に修正している。鈴木真年の『百家系図』でも火焰皇子―阿方王―額田鏡王になっている。

そのため、本論でのちに示す威奈氏の推定系図では、火焰皇子（『記』火穂王ほのほのきみ）を遠祖としていることを断っておく。

そして、前掲の系図と併せて参考にすべき遺物に「金銅威奈大村骨蔵器」（以下「骨蔵器」と称する）がある。それは徳川第十代將軍家治の時代、摂津に隣接する香芝（奈良県）で発見されて、現在は四天王寺が所蔵する国宝であり、骨を納められた威奈大村は前系図に記される大村である。

そして、「骨蔵器」の銘文（三十九行で全三百十九字の）の初文は「檜前五百野宮御宇天皇之四世後岡本聖朝紫冠威奈鏡公之第三子也」で、大村が第二十八代宣化天皇の四世で後岡本聖朝において紫冠を賜った威奈鏡公の第三子だったこと、従って大村が宣化天皇の五世王だったことであり、大村がそれを誇りに思っていたことを十分に窺わせる書き出しになっている。

また大村の生没年については、「骨蔵器」に越城（越後）において慶雲四年（七〇七年）に四十六歳で薨じたとあるので、逆算すれば生年は六六二年（天智元年）になる。

国文学者で歌人だった尾山篤二郎氏は、「骨蔵器」に彫られた威奈鏡公を『紀』の鏡王また韋那公高見と同一人物とみなして、鏡王女を長女、額田姫王を第二、大村を第三子と解釈した（『額田ノ姫王攷』。攷は考の異字）。

しかし、系図との対比から鏡公は鏡王だが、その第一子が高見王、第二子が磐鍬王いわすきだったことが明らかで、尾山氏の直感的な推理とは異なることになる。

大村の初見は『統紀』大宝三年（七〇三年）十月条で、翌年に行われる持統太上天皇の葬儀の準備のために、「大宝令」によって従五位下になっていた猪名真人大村まひとが臨時職の御

装副官に任じられた記事である。

この真人は天武十三年（六八四年）に定められた「八色の姓」において応神・継体天皇以降の子孫に与えられた臣下最高位の姓である。

鏡王の第一子とみなされる猪名公高見は「孝徳紀」に記される。

その記事は、元号を大化から白雉に改元するために難波の小郡宮おごおりで行われた儀式（六五〇年二月）であり、穴戸国から献上された雉を乗せた輿を中庭から天皇の宮殿の前まで持つて進んだ四人の近臣の内の二番目が高見だった。

九世紀になって定められた律令の解説書『令義解』りょうのぎげでは「位を授けられる者は皆二十五歳以上に限るが蔭叙（蔭位おんいによる叙位）は二十一歳以上」として、同時期に編纂された『日本後紀』（国立国会図書館デジタルコレクション）佐伯有義校訂標注「増補 六國史 巻五」の「桓武紀」延暦十五年十二月丙寅には「天皇親族の四世・五世王及び五世王の嫡子で二十一歳を満した者には叙正六位上を叙し、その庶子は一階下を叙す」と蔭位について更に詳しく説明されている。

「蔭位」は「大宝令」の選任令に始まった制度で、二十一歳（以上）になった高位者の子孫が一定以上の階位を授けられる、つまり、貴族の子が（全員ではないが）早く貴族になれる道を開いた規定である。そして、そこで明文化されたということは、前例があったことを暗示していると理解できる。

ここから、孝徳天皇は臣籍降下した宣化天皇四世鏡王に対する謝意を示すために、二十歳になった嫡子の五世高見王高見を正六位上に任じて、近臣として大抜擢した可能性が考えられる。

そうなれば、高見が六五〇年に二十一歳であれば生年は六三〇年（舒明二年）であり、更に、それが鏡王十七歳の年であれば鏡王の生年は六一四年（推古二十二年）だったことになる。

そして、高見の没年については、「天武紀」（上）の天武元年（六七二年）十二月条、つまり「壬申の乱」の戦記が「是月、大紫韋那公高見薨」で締めくくられている。

従って、死因は不明だが、四十三歳という若さだったことになる。

大紫の位は「冠位二十六階」の第五位だが実際は官職を超越した特別名譽位で、その下の小紫が大臣級だった。孝徳期の大紫は左大臣になった巨勢徳太と右大臣になった大伴馬飼（長徳ながとく）だけで、天智・大友朝の左大臣蘇我赤兄も右大臣中臣金も、小紫より一階級下

の大錦上だった。天智朝では長徳のあとを継いだ右大臣蘇我連子（蘇我赤兄等の異母兄）が大紫を受けているが、これは死後の贈位だったものと考えられる。

これに対して、「乱」によって成立した天武朝において、「冠位四十八階」（六八五年）以前の冠位については、「壬申年之勞」、「壬申年之功」、「壬申年勲積」等の名称で乱の功臣に対して、紫冠を含む死後贈位が大幅に増えていることが目に付く。高見を除いて、名前を記される大紫は六名で、小紫は四名である。それらには内大紫や外小紫といった内位と外位も含まれるが、本論ではこの説明は省く。

しかし、高見は孝徳期以降、斉明・天智・大友朝の間に昇進したことも大紫に任じられるほどの実績も冠位も全く記されていない。それにもかかわらず『紀』卷廿八の末文に大紫と記される。

ここから、天武天皇から高見が「乱」に対して何らかの、極めて大きな功績があったと認められたので、天武朝が始まってすぐ（即位前或いは即位直後）に最初の死後贈位を行った、と考えられるのである。

ちなみに、「骨臓器」によれば、大村は二十六歳以降になった持統期に務広肆（三十二位）、その後直広肆（十六位）に、更に文武期には少納言に叙位されている。つまり、大村は蔭位を受けられずに下位の官人から出仕が始まったことを示している。

これは高見との三十二歳違いになる兄弟としては大きな年の差と共に、大村が高見の母より低位の母から生まれたことを暗示してものと考えられる。

高見の弟で大村の兄だった磐鍬は『紀』「天武紀」に現れる。――「壬申の乱」の時に朝廷の東国への興兵使（兵の徴収役）になったが、先行させた二人の従者、東漢氏の武將だった書直ふみあたりのくすりと忍坂直大摩侶おしさかのあたのおおまろが大海人軍に捕らえられたのを見て、一人で近江に逃げ帰ったという記事である。

磐鍬は大海人皇子と旧知であり、東漢氏の大半の兵士は大海人皇子に従っていたので、この三名が大海人軍の分断役を兼ねて選ばれたと考えられるが、それはともかく、山部王（舒明天皇孫）や石川王（敏達天皇孫）など、他の王が王の称号を付けて記されているのに磐鍬は王と記されていない。宮でさほど重要な立場にあったとは思えない上に、兵を集められずに逃げ帰ったので、その後の処遇が更に悪くなった好くなった

磐鍬の生没年は不明で真人になれなかったとみなされ、その主因は磐鍬が「乱」で近江朝廷側についたことだったのだろうが、それも磐鍬が高見と異母だったことを示すものと

考えられる。

③紫冠威奈鏡公

本論の主題から外れるが、威奈鏡公（『後胤志』の額田鏡王）が授けられた紫冠について若干の考証事項を挟ませて戴きたい。

まず、その紫冠は小紫だとみなされることである。紫冠には中位が無く大紫と小紫があるが、鏡公が小紫でなければ高見のように大紫と記されていたはずだからである。

そして、鏡公に対して紫冠を授けられた時期について、通説とは異なる私見を簡単に述べさせて戴きたい。

「骨蔵器」はそれを「後岡本聖朝」と明記しており、史学会における後岡本朝の解釈は舒明天皇の岡本宮跡に造営された後飛鳥岡本宮に拠った斉明朝だから、後岡本聖朝も斉明朝とする。

「骨蔵器」に彫られる二つの聖朝の内、大村が真人姓を授かって官人の起点になった「後清原聖朝」が持統朝であり、卿となって人生を終えることができた「藤原聖朝」が文武朝であることは年代的にも疑いようが無い。従って、これらの聖朝は「聖」を意味した真人と猪名真人大村にとつての「聖なる朝廷」両方の意味を含んだ語だったと思われる。

しかし、「後岡本聖朝」は真人姓の制定以前だから真人の意味は無く、鏡王が紫冠を受けたことが大村の順調な人生を決めることになった聖なる朝廷だった、と大村が思っていたことを示唆しているようである。

天皇	在位年	即位宮	王宮	「骨蔵器」	後尾主改年
43元明	(707.7.15)	藤原宮	↓平城宮	藤原聖朝	(額田)鏡王
42文武	(699.7.7)	藤原宮	藤原宮	藤原聖朝	尊那公高見王
41持統	(688.7.7)	飛鳥淨御原宮	飛鳥淨御原宮	後清原聖朝	威奈真人大村
40文武	(677.2.6)	後飛鳥岡本宮	飛鳥淨御原宮	?	
39弘文	(672.2.6)	近江大津宮	近江大津宮		
38天智	(662.2.6)	長津宮	近江大津宮		
37齊明	(655.5.6)	板蓋宮	飛鳥川原宮↓後飛鳥岡本宮	後岡本聖朝?	
36孝徳	(645.5.6)	板蓋宮	難波長柄豊崎宮		
35皇極	(642.2.6)	百濟宮	小墾田宮↓板蓋宮		
34舒明	(629.2.4)	小墾田宮	飛鳥岡本宮		
33推古	(593.2.8)	豊浦宮	小墾田宮		

そして、飛鳥における天皇の即位宮と王宮については、板蓋宮・後飛鳥岡本宮・飛鳥淨御原宮はすべて、遺跡が重なっている箇所があることから証明されたのだが、焼失した舒明天皇の飛鳥岡本宮の跡地を整備拡張して営まれた。従って、広義には皇極・孝徳・斉明・天武天皇は後飛鳥岡本宮に拠ったという見方もできるので、その内のどれを大村が「聖

なる朝廷」と思ったかという観点から「後岡本聖朝」を考えてみる必要がある。

これについては先ず、臣籍降下して威奈氏の開祖になった鏡王が為奈里に居を構えて大村の兄の高見が近臣に取り立てられた、孝徳朝だった可能性が考えられるかもしれない。

しかし、孝徳天皇は中大兄太子に見捨てられて崩じた。また斉明天皇は国政の実権を握った中大兄太子に重祚を強いられ、そして鏡王もその子女も優遇したとは思えない天智天皇は大村が十歳の年に崩じている。

皇子時代から天智天皇の裏には常に鎌足がいたのでその影響も考えなければならぬだろうが、孝徳朝も斉明朝も無論天智朝も、大村或いは葬儀を執り行った僧が「聖朝」と崇めた理由は筆者には想像もできない。

これに対して、高見に対する大紫の（死後）贈位は天武天皇が行ったものと考えられ、磐楯を除く猪名公に対する真人姓を授けたのは天武天皇が最初で、天武朝が猪名氏復権と拡大の切掛けになった。

そして、大村の姉の鏡姫王は中大兄皇子の妃になり、額田姫王は大海人皇子の妻になったが、鏡姫王は鎌足に下げ渡されてその娘の氷上娘は天武天皇の夫人になり、鏡王の娘と孫娘が天武天皇の親族になった。また、「八色の姓」が制定された六八四年に大村は二十三歳、——その年に真人になったかどうか不明だが、天武天皇が真人姓を定めたから大村は真人になれたのである。

これらの事実に加えて、高見を大紫にした時に鏡王に対しては紫冠（小紫）を贈ったと考えれば、また大村の昇進が始まった持統朝（後清原聖朝）に先立つ天武朝を「骨蔵器」が聖朝とした状況は十分に推測できる。

そして、天武天皇と岡本宮の繋がりについて、『紀』は明記している。——「乱」に勝利した天武天皇は六七二年九月八日に不破を発って十二日に倭京（飛鳥）に着いて嶋宮に入った。その三日後、「癸卯、自嶋宮移岡本宮（十五日に嶋宮から岡本宮にお移りになった）。是年、營宮室於岡本宮南。即冬、還以居焉。是謂飛鳥淨御原宮。（この歳、宮殿を岡本宮の南にお造りになり、冬にそこにお移りになった。これを飛鳥淨御原宮しむせりのきよみはらのみやという）」と。

つまり、天武天皇は岡本宮跡に用意されていた建物を仮宮として三カ月間政務を執つてから、その南側を整備して新しく造られた飛鳥淨御原宮の本殿に移った。

従って、大村は天武朝廷の始まりを元の岡本宮の地にあったと認識しており、そこで先ず父と兄が顕彰されただけでなく、のちに威奈氏が多大の恩恵を受けることになった天武



朝を「後岡本聖朝」と刻ませた、と理解するのが最も妥当な解釈ではないかと思われるのである。

#### ④鏡姫王と藤原鎌足

鏡姫王と藤原鎌足の関係について、直木幸次郎氏『額田王』は「王でなかった鎌足が女王を娶れたはずがない。鏡王の娘とは額田王のことであろう」として、額田（姫）王と大海人皇子の婚姻を認めつつ、鎌足と鏡姫王の婚姻は否定した。また、結論として額田王と鏡女王は同一人物で、舒明天皇の鏡女王は別人とした。

しかしこれは、大歴史学者の節でも史学会でも異説と見られており、本考察においては「鏡女王は最初に中大兄皇子の妃だったが鎌足に降嫁させられた」という一般的な立場を採る。

その背後にあからさまに見えるのが、「乙巳の変」によって天皇になれた孝徳天皇と太子になれた中大兄皇子の計算である。

「変」の衝撃を受けて皇極天皇が突然退位して、山背王事件の裏で暗躍した人物たちが天皇以下の新朝廷の要職を占めた。そして、それらの人物の推薦を受けて、表に出せない最大の功績者に対する法外な恩賞として、三十二歳の鎌足に最高位の大徳だいとくが授けられて前例のない内臣うちのおみという職位が与えられた。

臣姓の豪族の最高位が天皇を補佐する大臣で、上級官僚とはいえ「(神祇)伯」で連姓むすじだった鎌足が天皇の側近になること自体が異例だったのに、内臣うちのおみという特別職によって皇族級の「(鎌足)公」と呼ばれることになった。つまり、鎌足と臣籍降下して鏡公と称された鏡王は、尊称上では同じ階級の高級貴族になり、これによって鎌足が女王を娶ることができる条件が整えられた訳で、そこには鎌足を孝徳天皇の相談役とも言える要職に就けるための推薦には当然中大兄皇子の直接的な関与が考えられる。

中大兄皇子と鎌足にとって「変」が成功した場合の孝徳天皇の擁立・古人前太子の殺害とその財の募集は一連の計画事項であり、中大兄新太子にとって鎌足の抜擢・鏡女王の鎌足への降嫁・倭姫王（第一章（4）参照）との婚姻はそれに続く政略であり、鏡女王の降嫁という想定外の手段によって鎌足を天皇から離れさせて自分の腹心にするという強烈な意思が見えるようである。

次に、史料に無い鏡姫王の生年については、史学の範疇から外れるかもしれないが、こ

ここでは『万葉集』を参考にしてみたい。

内大臣藤原卿が鏡王女を娉とひし時に、鏡王女の内大臣に贈る歌一首（九十三）

玉匣 覆乎安美 開而行者 君名者雖有 吾名乃惜裳

（玉くしげ 覆うを休み 明けていなば 君が名はあれど 吾が名しおしも）

「娉とう」は女性の名を聞いて正式に妻問いをすることで、女性が名を明かしたということとは相手を受け入れた意味である。また「くしげ」は櫛け（を入れる）笥け（箱）、化粧箱のことで、玉くしげはその美称である。

そして、その歌の一般的な解釈は、「玉くしげの蓋をして覆うように、二人の仲を隠すのはたやすいと、夜が明けてからお帰りになると、あなたの名が噂になっても私の浮名が立つのは口惜しいのです」といった意味とされている。

しかし、櫛け笥は鏡の前で使う物なので、鏡王女を暗示すると思われる。すると歌の意味を私訳すると、「あなたが私を覆うのをやめて夜明け前に帰ると、あなたの名前が知られる。あなたはそれでいいかも知れませんが私の名前が出るのは口惜しい」ということになるだろう。「皆には中大兄皇子の妃だと思われるのに、あなたを受け入れ始めたことを知られたら恥ずかしい」という、矜持の高さが表れている。

内大臣藤原卿が鏡王女に報えて贈る歌一首（九十四）

玉匣 将見圓山乃 狭名葛 佐不寐者遂尔 有勝麻之自

（玉くしげ 御室の山の さなかづら さ寝ずは遂に ありかつましじ）

この後半部は、「添い寝をしなければ、どうしても耐えられそうにない」といった意味とされることが多い。しかし、「佐不寝」にわざわざ「不」を用いることで、添い寝ができていないことは示されていると思われる。それよりも、直感的には「有勝麻之自」から「自分の妻しじ・（四季。つまり一年中）」が浮かんでくる。ずっと妻でいて欲しい意味も読み込んだのかもしれない。

鎌足は鏡王女と単に一緒に寝たいと言っているのではなく、添い寝を求めていると取れるから、鎌足がこの歌を詠んだ頃は、妻問いをしながらもまだ一緒に眠って起きる関係になかった、ということになる。

そして、それらの歌が詠まれた年は、内容から察するに「乙巳の変」のあとの六四五年、中大兄皇子が異母兄の古人大兄皇子を攻め殺してその娘つまり姪の倭姫王を正妃とする直前の頃ではないかと思われる。

また鏡王の生年は六一三年頃とみなしたので、その長女と考えられる鏡姫王は六二九年（舒明元年）頃の生まれで、高見の一、二歳上の姉だったものと考えられる。

そして、鏡姫王のその年齢から推定されることは、六四五年にはまだ十七歳くらいだから、妃になってすぐに、恐らく一年位で鎌足に下げ渡されたことになり、その婚姻がいかに政略的で無理に行われたことが窺われる。

### ⑤鏡姫王と藤原不比等

平安初期の九世紀末に撰上された『興福寺縁起』は鏡女王を藤原鎌足の嫡室（正妻）、そして不比等の母としている。

興福寺（奈良市）は鏡姫王が鎌足の病氣平癒を祈るために山背に建てた山階寺が前身で、それが天武期に藤原の厩坂寺になり、のちに不比等が平城京に移して国費を投じて藤原氏の氏寺にした大寺であり、その縁起書は藤原氏によって記された書である。

また平安末期になると、「（鎌足大臣の）御子の右大臣不比等のおとど、実は天智天皇の御子なり。されど、鎌足のおとどの二郎（次男）になり給えり」（『大鏡』の「藤原氏物語」）、「天智天皇は既に懐妊していた后を内大臣に譲り、定恵和尚を生まれた。

（その後は）また大臣の子を産まれて、それが淡海公（不比等）である」（『今昔物語集』巻第二十二）と、これも后を不明にしているが、定恵と不比等を天智天皇の子としている。

藤原氏の政権下で編まれたこれらの物語には系譜説明に明らかな誤りが多く、持統期における不比等の異常ともいえる昇進を説明して、藤原氏興隆の基になった不比等を天智天皇の子と伝えようとする忖度があったと思われる。

しかし、鏡姫王が鎌足の正室であっても、不比等の母だったかどうかは別の問題である。不比等の父を天智天皇と見る流れは、鎌倉時代に編まれた史書の『帝王編年記』にも及んでいるが、斉明五年条に「皇太子（天智大王）が妊娠した寵姫で御息所の車持公くるまぢの女の婦人を内臣鎌子に賜った」と、不比等の母を初めて車持公の女の子としている。

そして『大日本仏教全書』（国立国会図書館デジタルコレクション）に収められた『多武峰縁起』の関係箇所、大化元年に鎌足が内臣に任じられた後の記事を私訳すると、「（孝徳天皇は鎌足に）車持夫人と号した懐妊して六カ月の寵妃を賜り、男が生まれたら臣（鎌

足)の子として女ならば朕の子とする。これを固く守れと言って送り出した。四カ月後に生まれたのは男だった。それが定恵和尚である」としている。

続けて三年条には「定恵和尚者。中臣連一男。實天萬要豐日天皇皇子也。大化元年乙巳誕生」とあり、その後には「帰朝した定恵和尚は弟右大臣不比等に拝謁して」とあり、別の箇所には「右大臣不比等 大織冠一男」とあるので、定恵と不比等は兄弟だが不比等は鎌足の長男であるとしている。

その後、南北朝～室町時代にかけて作られた初期系図の大書に『尊卑分脈』がある。正式には『新編纂図本朝尊卑分脈系譜雜類要集』で、単に『大系図』とも呼ばれる。そして、吉川弘文館発行『新訂増補国史大系』(国立国会図書館所蔵)によれば、その「第壹卷」中の「藤氏太祖傳」(不比等傳)の開始部分は、「内大臣鎌足第二子也、一名史、齋明天皇五年生公、有所避難、便餐於山科田邊史大隅等家、其以名史也、母車持國子君之女、與志古娘也」としている。ここでは父の名を伏せて母の名を明記している。

これらの記述の変遷と内容から、「定恵の父は孝徳天皇で不比等の父は鎌足、母はいずれも車持与志古娘」と推定されることになった。

そして、定恵の誕生は『多武峰縁起』において大化元年(六四五年)とされているが、『家伝』(藤氏家伝)の「貞慧伝」に「白鳳十六年乙丑に廿三で終わりぬ」とあり、その年については疑義があったが六六五年と解釈されて、六四三年生まれとされた。従って、与志古娘の生年は六二七年(推古三十五年)前後で、六四八年に耳面刀自(壺志姫王の母)、六五九年(三十三歳頃)に不比等をもうけたものと考えられる。

これに対して、六二九年(舒明元年)頃の生まれで与志古娘より二歳くらい下だったと考えられる鏡姫王は氷上娘をもうけて、氷上娘は天武天皇の夫人になって但馬皇女の母になった。氷上娘が薨じるのは六八二年である。

そして『百家系図』と『皇胤志』に拠れば鏡姫王は五百重娘の母でもあり、五百重娘は天武天皇の夫人として第十皇子の新田部皇子を、のちに不比等の後妻になって六九五年に藤原麻呂を生んだ。

新田部皇子の異母兄で第九皇子の弓削皇子(母は天智天皇の娘の大江皇女)の生年を六七三年頃と推定する説があるとのことなので(「ウィキペディア」)、それに基づく新田部皇子の生年は六七三年以降である。

そこで、新田部皇子の生年を六七七年(天武六年)、その年に五百重娘が十六歳だったと

仮定すると、五百重娘は六六二年（天智元年）生まれで不比等より三歳下だったことになる、三十四歳で藤原麻呂をもうけたことになる。新田部皇子は七〇〇年に浄広弑（翌年に制定される「大宝令」の正四位下相当）に任じられているので、新田部皇子及び五百重娘の推定生年は数年の誤差に収められるだろう。

蛇足になるが、鎌足が薨じたのは六六九年である。従って、五百重娘が天武天皇に嫁したのは鎌足の希望や政略ではなく、鏡姫王が天武天皇との姻戚関係の強化を望んで五百重娘の献上を申し入れて、天武天皇はそれを受け入れたように思われるのである。

また、持統天皇が不比等に対して夫の妻の一人だった五百重娘をもらい受けることを許した裏には、『尊卑分脈』（第3巻 磨卿流）に記された不比等と五百重娘の不義を知っていたのかもしれないが、不比等と五百重娘が同母でなかった、つまり不比等の実母が鏡姫王でなかったことを示唆するものである。

とはいえ、与志古娘が没したあと、鏡姫王が不比等の「育ての親」になっていたことはまちがいになく、藤原氏はそれを興福寺の偉大さを強調するための縁起に取り込んだものと思われる。

史が『紀』で初めて記されるのは持統三年（六八九年）で、位は直広肆（じきこうし、従五位下相当）で地方官の国司、また太上官では少納言に相当する朝臣の姓を冠した貴族として、三十一歳にして突然朝廷の舞台に顔を連ねることになった。

その少し前、不比等は天武期の末期（六七八年頃。二〇歳頃）に、天智期の右大臣だった蘇我連子の娘娼子（むらじこ）を正室に迎えたと言われる。従って、それは天武天皇に許された婚姻だったはずであり、その裏には讚良皇后の後押しがあったと思われるので、不比等は既に鎌足の子として持統天皇の内舎人として働き、鎌足から受け継いだ血と、文官としての稀有の才能と見識を認められていたように思われる。

梅原猛氏（『神々の流竄』）の説に従えば、その謎を解く一つの鍵が、六八六年に「天武天皇が二十八歳の舎人、稗田阿礼に帝皇の日継及び先代の旧辞を誦み習わした」とする『記』の序文にある。——同年九月に天武天皇が崩御して十月に大津皇子が断罪されているから、古事を誦習させたのは持統皇后で、その年に史は二十八歳だったから、名前以外不詳の稗田阿礼は皇后の舎人をしていた史の偽名だった、とみなしたのである。

それは正鵠を得た推理だと思うが、いずれにしても後世不比等の父母に疑義が生じた原因は、『家伝』に付属していた肝心の「不比等別伝」と、『紀』に付属していた系図一卷

が丸ごと失われたことにある。

それは恐らく意図的な仕業であるが、子孫によるものではなく、不比等自身が破棄した可能性が考えられる。不比等は、天智天皇の子でも鏡女王の子でもなかったことを記した自伝と系図を、ご落胤の噂を利用して不比等の能力を最大限に發揮させて昇進の口実にする、人生最大の恩人になった持統天皇のために廃棄したように思われるのである。

もしも落胤伝説が事実であれば、不比等の後胤たちは事あるごとにそれを喧伝しただろうし、あらゆる書にそれを書き残しただろう。光仁天皇と桓武天皇の即位時にはそれを詔の文言に加えさせただろう。しかし、間違<sup>•</sup>つ<sup>•</sup>た<sup>•</sup>噂<sup>•</sup>に頼る必要がなくなつてから藤原氏はそれを言わなくなり、鏡姫王に対する祭祀も行わず墓を「無守戸」のままにしたのだろう。

天智天皇の御威光が必要だったのはむしろ、「不改常典」を持ち出して即位の正当性を訴えた天皇家である。天武系天皇末期の元明天皇・聖武天皇・孝謙天皇、そして藤原氏によって天智系に戻ったばかりの桓武天皇と、「不改常典」を抛り所にした即位の詔がそれを現している。

#### ⑥押坂錦間皇女

鏡姫王は舒明天皇の直孫だったが鏡姫王の父の鏡王は舒明天皇の皇子でも他天皇の皇子でもなかった。

この関係を解くには、鏡王は舒明天皇の皇女を妃にして鏡女王を、そして恐らくその一〜二年後に高見をもうけた、と考えるしかない。

そして、その妃の候補者として、舒明天皇の皇女の中で『紀』には記されないが他書に名前が残る皇女が三名いる。——『本朝皇胤紹運録』（国文学研究資料館版）において間人皇女の次に記される布敷皇女、次に押坂錦間皇女おしかかのしきま（母香櫛娘かぐし）、その次で最後の箭田皇女やた（母手杯娘）である。

これらは『一代要記』（国文学研究資料館版）における布敷皇子（母同古人）、次に押坂錦向皇子（母香櫛媛）、箭田皇子（母手柘媛）に対応しており、古人皇と同母の布敷皇子の母は蘇我法提媛なので『本朝皇胤紹運録』の蘇我嶋大臣女法提大娘媛、つまり『紀』の法提娘媛郎女ということになる。

そして、箭田皇女については本論「第一章（4）倭姫王」の項で倭姫王の母だったと考えられることを考証した。

布敷皇女は古人大兄皇子の実妹で生年が六一六年くらいだったと思われるが、それ以外

は不詳である。しかし、押坂錦間皇女も不詳とはいえ、鏡王と結び付けられる要素が見出される。

押坂錦間皇女の母は舒明天皇の後宮から選ばれた香櫛娘で、和珥氏系古族だった粟田臣の出である。和珥氏は、葛城氏の衰退と入れ替わりに雄略天皇以前から歴代天皇に皇后や妃を輩出した名族で、春日・小野・粟田・柿本・杵志姫王の項で触れた老師君等の枝族を生んだ。

舒明朝における粟田臣姓の重臣は細目ほそめで、推古十九年（六一一年）に行われた鹿の若角を獲る薬獵くすりがりでは先頭集団の指揮者をして、舒明天皇の喪葬の儀（六四二年）では二番目に、軽皇子（のちの孝徳天皇）に代って誄しひを奏上している。冠位は小徳で巨勢徳太、大伴馬飼と同列だった。

細目は六一三年生まれと想定された鏡王より一世代前の人物だから鏡王の父の阿方王とほぼ同世代で、五九三年生まれの舒明天皇より一回り程度上だったと推定される。

そして孝徳期になると白雉への改元の儀式（六五〇年）で、粟田飯虫いひむし（飯蟲）ら四人が白い雉を乗せた輿を宮門の外から中庭まで運び、『紀』粟田飯蟲 以粟田臣飯蟲等四人、使執雉輿…、そこから輿を天皇の宮殿の前に進んだ四人の内の一人が猪名高見だった。

飯虫は高見とほぼ同年代だが蔭位を受けたであろう高見より年上だったと見るのが妥当である。

また、天武朝の六八一年に小錦下という高位に就いて、「八色の姓」において朝臣姓を授けられた粟田臣真人がいる。

真人の生年は六五一〜六五五年くらいと推定されるので、威奈大村より十歳近く年上だったと思われる。

それはともかく、阿方王以下各世代の威奈公と粟田臣との間に親交があったことは想像に難くなく、この点も含めて、細目の娘が香櫛娘であり、舒明天皇は重臣の娘、数歳下の香櫛娘を妻にして押坂錦間皇女をもうけた、そして宣化天皇四世で鏡の生産と管理を司る最高責任者だった臣籍降下する前の鏡王なら、身分的にも年齢的にも押坂錦間皇女を正室にできる立場にあったと認められただろう。

そして関係人物の年齢については、香櫛娘の生年は五九三年、押坂錦間皇女の生年は六一〇年くらいに想定できるので、押坂錦間皇女は鏡王より三歳くらい上だったと思われる。

そこにこれまでの仮定・推定を合わせた結果、高見は鏡王十七歳、押坂錦間皇女二〇歳の年の嫡男で、鏡姫王はその二年前に生まれた、と考えることが可能になるだろう。

鏡王が管掌したとみなされる鏡作連や鏡作部の職人たちの倭における本拠地は、磯城郡鏡作郷（現田原本町）で、鏡作神社（鏡作かがみくりにますあまてるみたま坐天照御魂神社）を含めて鏡作を冠する古社が三社残っている。

カガミがつく地名は岐阜県各務原市や全国に残るが、鏡王は飛鳥にあっても近江に移っても、朝廷の祀り事に不可欠な鏡の製造部族の管理を委ねられたのではないか、と考えられる。曾祖父の称号火焰皇子からして、鉄の溶解炉や溶解した鉄に直結した名前だったように思われる。

しかし、鏡姫王がそこで養育されたとは思えない。

以上の考察から、鏡姫王については、倭の鏡作の地名は関係無く、父の称号を受け継いだ女王であり、飛鳥岡本宮にあったと推定される押坂錦間皇女の宮で天皇の孫として大切に、また気品高く育てられたように思われるのである。



## (2) 額田姫王(ぬかたのひめきみ)

### ① 額田姫王の生年

古来様々な論議が尽きない額田姫王、『万葉集』の額田王また『葉師寺縁起』の「額田部姫王」だが、系譜で一つだけ明らかかな事がある。その最も古いものが『紀』「天武紀」(下)に記された「天皇初娶鏡王女額田姫王生十市皇女」(天皇は初めに鏡王の女の額田姫王を娶られて(額田姫王は)十市皇女を生まれた)である。

それに続いて「次納胸形君德善女尼子娘、生高市皇子命」(次に胸形君德善の女の尼子娘を納められ高市皇子命を生まれた)、或いは額田姫王より前には「先納皇后姉大田皇女」(皇后の姉の大田皇女を納められ)とある。つまり、額田姫王が鏡王から上「納」された妻ではなく、大海人皇子が額田姫王を望んで鏡王がそれを認めて、妻に「娶」った経緯を読める。

『懷風藻』葛野王二首の項に「母は天武天皇の長女十市内親王なり」とあるので、額田姫王を娶ったのが天武天皇の初婚であり、時期的には、中大兄皇子と鏡姫王との婚姻(六四四年頃)のあと、六四五年(大化元年)頃だったと思われる。

しかし、天武天皇もそうだが、額田姫王、十市皇女(六七八年薨)、その子で天智天皇と天武天皇の孫になる葛野王はすべて生年不明である。

但し、額田姫王の生年は六三一〜六三七年頃、十市皇女の生年は六五三年(白雉四年)または六四八年(大化四年)と見る説が多いようで、葛野王の生年は六六九年(天智八年)で享年を三十七歳とする通説がある。

葛野王の没年は、『統紀』に文武天皇の慶雲二年(七〇六年)十二月に卒と記されている。そして『懷風藻』には、葛野王に対して叙位が行われた記事がある(「特閲シテ正四位ヲ授ケ 式部卿ニ拝ス 時年三十七」)。

この「時年三十七」を享年と見たのが通説になったようだが、その文章は「正四位式部卿に任じられた時に三十七歳だった」としか読めない。大友皇子や河島皇子のように死亡を告げる文に続いていないからである。そして、その叙位の年は不明であるが、没した年には正四位上だったから、三十七歳では正四位下に任じられたものと考えられる。

『懷風藻』のその記事は、高市皇子が薨じた後(六九六年七月)から文武天皇が即位する前(六九七年七月)に行われた、若すぎる珂瑠皇子(文武天皇)の即位を葛野王が正当化する内容であり、叙位を行ったのが持統天皇だった可能性はある。しかし、正四位も式

部卿も「大宝令」からだから、その叙位が大宝元年（七〇一年）に行われたとすれば、生年は六六五年、四十一歳で死去したことになる。しかし、式部卿の変遷から叙位を六〇三年と見れば、生年は六六七年（天智六年）で享年四十歳になる（「額田王に関する一考察」有村和子）。本論ではこの仮説を基準にして考えたい。

従って、十市皇女が六四八年生まれであれば葛野王は二十歳の年の子になるが、六五三年生まれだと十五歳になり、これには抵抗感を否めないもので、十市皇女の生年は六四八年説が妥当だと思われる。

ここから、十市皇女は夫になった大友皇子、また鎌足から大友皇子の妻（恐らく夫人）として差し出された耳面刀自とも同年だったと推定される。また、六六八年（天智七年）五月五日に蒲生野、六六九年の五月五日に山科野で行われた遊獵には葛野王の節句祝いの意味があった、と考えていた筆者の推定ともつながることになったのである。

そして、六四八年生まれの十市皇女が額田姫王十八歳の年の娘であれば、「額田姫王は六三二年（舒明四年）頃の生まれだった」と考えることが可能になる。この推定に数年の誤差はあるかもしれないが、鏡王より年下だったことは間違いないと思われる。

結果、本論における一つの結論として、「**額田姫王は鏡姫王の三歳下の異母妹だった**」とみなされることが導き出されたと言えるのである。

鏡姫王も額田姫王も鏡王の娘だったが、鏡姫王の母が押坂錦間皇女と推定されたのに対して、額田姫王の母は吹黄戸自ふきのとじと記されている（『皇胤志』）。

本考察の命題は「姫王は天皇の娘で、王の長女だった」ことを証明することだったが、ここまでの考察で一人の王が二人の姫王の父だったことはない。それを解くには「鏡姫王は鏡王の長女だった」と「額田姫王は額田鏡王の長女だった」という相反する説が成立しなければならぬ。その解答への道筋を示してくれたのが吹黄戸自である。

そして、「額田姫王は舒明天皇の直孫ではなく、鏡王が押坂錦間皇女とは別の妻との間にもうけた娘であり、舒明天皇の義理の孫になる女王だった」という推理ができることになったのである。

そのためには、額田姫王は余程特別な女王だったからだ、と考えざるを得ない。

その理由の一つは、舒明天皇の義理の孫として生まれ、歌の特異な才能を発揮しながら斉明・天智天皇の側に仕え、天武天皇の正妻になり、天武天皇の崩御後には藤原朝臣大嶋（中臣大嶋）の後妻になったと考えられ、元明天皇の代まで歴代の天皇と近い関係を持

った、最高位の貴族級のただ一人の女性だったことに拠るのだろう。鏡王の娘が後宮に差し出された采女だったとか巫女だったという見方には全く賛同できない。そして、額田姫王が特別視された別の理由がその母にもあったと考えると不思議は無いだろう。

## ②額田部連氏

特別で異例の額田姫王に直結する吹黄戸自の出自を示唆するのが、額田鏡王と額田姫王に冠せられた「額田」にあると考えられる。

しかし、額田を冠する氏族は九州から関東北部まで多く分布しており、複雑で不明点が多い。そこで主眼を鏡王、吹芟刀自との接点に置いて探ってみよう。

そのためには、額田・額田部諸氏の中で額田部連氏に注目すべきだろう。

額田部連氏は推古期までに各地の額田部氏の頂点にあったと考えられ、その大きな原動力になったのが、そこには蘇我馬子の介在があったのだろうが、額田部皇女の養育者になったとみなされていることである。

粟田細目が六一一年に葉くすりがりで先頭集団の指揮者をしたことは既に触れたが、そこで後方の指揮官を務めたのが、飾り馬（騎馬儀仗隊）の長でもあった額田部比羅夫連だった。比羅夫はその三年前に飾り馬七十五匹を率いて唐の客人（裴はいせいせい世清）を海石つばいち榴市（三輪山の南西部の金屋地域で開かれた市場）に出迎えている（『紀』推古十六年八月条）。つまり、推古天皇の名代を務めるほどの重要人物だった訳である。

このため額田部皇女は比羅夫の父（男性の額田王）に養育され、湯浴みは額田部湯ゆえ坐連の女性が受け持ったものと考えられる。

鏡王の父の阿方王は当然粟田氏と親交があったと思われ、その結果の一つが鏡王と押坂錦間皇女との婚姻だったと推測されるので、額田部連氏の王と比羅夫に対しては別の結果を求めた可能性が考えられることになる。

『紀』に初めて記される額田部連は五六一年（欽明二十二年）に諸国の使者の接待役に登用された額田部連（名不詳）である。これは比羅夫の祖父と思われ、阿方王の父で宣化天皇の子の火焰王子の時代だから、火焰王子と比羅夫の祖父・父と交流もあったものと考えられるだろう。

推古期に比羅夫が官馬の長として重用されたのは、額田氏一族が古くから馬の飼育・管理に携わっていたためと考えられており、それと共に幅広く認められているのが、額田氏

一族が製鉄や製品の製造に関わっていたことである。

六世紀後半に築かれたとみられる岡田山古墳（松江市大草町）から発見された円頭大刀に、銀象嵌の銘文「各田<sub>レ</sub>臣」があった。そのため太刀の製作者は額田部臣であり、額田臣氏は出雲から発生した部族で、皇室とも蘇我氏とも極めて深い関係を持っていたと捉えられることになった。

推古時代から額田部連一族の倭での本拠地は倭国平群郡額田郷にあった。氏寺はその中心部にある額安寺（奈良県大和郡山市額田部寺町）で、その規模は東西三町（約三百米）南北二町（約二百米）という大寺だった。

そして、額田部連一族と摂津との関連を示す痕跡の一つが、兵庫県尼崎市に残っていた額田の地名（現在の額田町から弥生が丘町辺り）だと思われるが、尼崎市立歴史博物館地域研究資料室では額田町と額田部氏との関連は不明としている。しかし、摂津国に天武期以前から額田部宿禰（旧姓は連）氏と額田部氏が、場所と居住開始時期は不明ながら、居住していたことは確認できる（『新撰姓氏録』第二帙左京神別 摂津国神別）。

一方、鏡王と威奈氏が本拠地にした摂津国河辺（川辺）郡為奈郷は、仁徳期の猪名<sub>あがた</sub>県あたりだったと考えられ、佐伯部が天皇に馬を献上したと記されている（仁徳紀）。場所は猪名川の西側、現在の尼崎市猪名寺周辺で額田の北西部に隣接していた。

猪名寺と額田町は4キロメートル弱しか離れておらず、古代に輿に乗っても半刻で十分に着ける距離なので、額田に額田部連氏がいたとすると、鏡王一族とは親交があったと見るのが妥当だろう。猪名寺（現在は廃寺）の寺域は一町半四方で伽藍配置は法隆寺式と推定されている。

また、額田町の西北西約1キロメートルで発見された若王寺遺跡<sub>なこうじ</sub>では、古墳時代初頭から古墳時代末期に亘る大規模な、半島系とみられる鍛冶集団の集落跡が見つかり、各種の土器、勾玉や砥石を含む石器、四十個以上の鞆羽口<sub>ふいばぐち</sub>（溶解炉の中に風を送り込むためにフイゴの先につけた土製の管）や鉄斧・鉄刀・鉄鏃が出土していて、砂鉄精錬が行われていたことが分った。そこで製鉄から行われたかどうかは不明だが、新羅系人が多数居住して持統天皇が養育された河内で多く見られるような、馬を運んだ船底材を再利用した井戸が見つかった。

河辺郡の南部一帯は遺跡の密集地帯のため安易な推測はできず、若王寺或いは周辺遺跡での中期以降の鍛冶作業に地域的・職制的に額田部氏の関与はあっただろうし、鏡王の移住の動機の一つもそこにあったのかもしれない、と思われる。

額田部氏の祖神について、宝賀寿男氏の関連サイト「古樹紀之房間」では「鈴木真年関係の系図史料から、額田毘道男の別称を持つ坂戸毘古が額田部連・額田部の祖先であり、天孫族が管掌した製鉄・鍛冶職掌部族である」と要約されている。

坂戸毘古は『記』で大国主の子の妻として記される日名照額田毘道男伊許知邇神の前半名に用いられた男神である。そして、大国主の別名とされる大物主の娘に比売多多良伊須気余理比売が現れ、これは『紀』の媛蹈鞬五十鈴媛命で神武天皇の初代皇后であり、『記』より四年前の撰上日が記される『粟鹿大明神元記』の豎系図に見える溝杭矢瀬姫蹈鞬五十鈴姫である。

ヒメタタライスケヨリヒメの元名は富登多多良伊須気余理比売で、三書共一人の女神名になぜ二度もヒメが付くのか疑問を感じるところではあるが、語頭のヒメは比売神、語尾のヒメは存命中の姫の呼称だったように思われるが、同時に皆「タタラ」の名を残していることが目に付く。

それは明らかに、わが国古代製鉄で用いられて倭語とは思えない語感を持つ「たたら」(鞆)、即ち粘土で作った炉に空気を送り込むために必要な吹子と、たたらを用いた「たたら製鉄」(たたら吹き)に拠った名だったと思われる。また、ホトは女陰を指す語でもあったが、富登は炉に空気を送り込むために炉の前の土に掘った溝の呼び名(火処・火窪・火戸)でもあった。

大阪府茨木市の溝咋神社はヒメタタライズヒメノミコトとその母の玉櫛媛を主祭神として、その祖父の溝咋耳命も祀っており、ミヅクイの名はミヅクイノヤセヒメまたホトと繋がる。

一方、鏡作部の遠祖は、『紀』巻第一(神代上)第七段の一書の一においては石凝姥命であり、一書の二ではその父の天糠戸命になっている。そして、イシコリドメは岩屋に籠った天照大神を引き出すための八咫鏡を作るために鹿の皮を剥いで天羽鞆を作った、と記されている。これは、初期のタタラは皮吹子で、鏡の鋳型は石だったことを示しているように思われる。

鏡作神社の祭神はアメノヌカトとイシコリドメで、近くの鏡作伊多神社はイシコリドメが祭神である。もう一社、鏡作麻氣神社はアメノヌカトの更に祖として製鉄・鍛冶の神の天目一箇神を祭神にしている。

イシコリドメのコリは坂戸毘古の曾孫、忍凝見命と同じ意味でつけられたと思われる、前

述の「古樹紀之房間」ではコリを鉄塊としている。

そして、アマノマヒトツノカミの父がアマテラスの子のアマツヒコネで、天孫額田部連や額田部湯坐連ゆえ、また摂津国凡河内忌寸おおしこうちのいみき、山背姫王の項で触れた山代直の祖である。そして凡河内（大河内）氏の稚子媛わかこひめが宣化天皇の妃になって威奈氏の祖になった火炎皇子をもうけたのである。

つまり、猪名氏から遠祖アマノマヒトツまで辿ることによって、額田部連氏が威奈氏よりはるかに古い有力氏族であり、平群郡額田郷で一族の額田部湯坐連（貴人の湯浴み役）も使って額田部皇女（推古天皇）、また鏡王の娘の額田（部）姫王の養育にも係ったと考えられる背景が浮かび上がったのである。

### ③吹黄戸自（吹茨刀自）

『万葉集』巻一（雑歌）第二十二番の歌の作者は、最も古い「西本願寺本」（七〜八世紀）で吹茨刀自ふか(ふ)きのとじ、最も新しい「元暦校本」（十二世紀）で吹黄刀自と記されている。

『万葉集』に採られた歌も人物も年代順ではないが、吹茨刀自の前後の詠み人は上表の通りで、それだけでも吹茨刀が有力な貴人だったことが分る。

そして、第二十二番の題詞（私訳）と歌は次の通りである。

明日香の清御原の宮の天皇（天武天皇）の代 十市皇女の伊勢の神宮に参拝された時、波多（三重県一志郡一志町）の横山の巖いわおを見て、吹茨刀自の作歌

河上乃 湯津盤村一草武左受 常丹毛冀名 常處女煮手  
 （河の上の え ゆつ磐村いむむらに 草むさず 常にも冀がもな 常處女とこおとめにて）

巻四 相聞				巻一 雑歌							歌番号	詩人
190	189	188	185	25	22	21	20	18	13	10		
181			186					17	14	11	8	9
			187					16	15	12		
吹茨刀自	鏡王女	額田王	額田王	阿閉皇女	吹茨刀自	大瀬人皇子	額田王	額田王	中大兄皇子	中皇命	額田王	

ウェブサイト「万葉集ナビ」によるこの意識は、「五十鈴川の清冽な岩群れに雑草が繁茂することがないように、十市皇女様もずっと處女のように美しく清らかであらせられるように。」である。

そして、その歌は『紀』天武四年（六七五年）二月条の、十市皇女と阿閉皇女を伊勢神宮に参拝させた記事に符合するものであり、『紀』に記載のない吹茨刀自がその旅に同行していたと捉えられることになった。

吹芟刀自・吹黄刀自を旅に同行した侍女と見る説があったが、その名から『皇胤志』の吹黄戸自であることは疑いようが無い。

従って、天武天皇の義母であり、大来皇女にも十市皇女にも血はつながらないが祖母だった。また、阿閉皇女は鸕野讚良皇后お気に入り、従姉で天武夫妻の義理の娘でもあった。そのため、天武天皇は大切な皇女たちの信頼できる保護者として、高齢でも元気だった義母に同行するように頼んだのだろうと推測できることになった。

当時飛鳥から伊勢へは徒歩で一週間くらいかかっており、警護の武人たちや輿をかつぐ人夫たちも入れてかなりの人数だったから、街道が整えられていた宇陀から名張を経由して北東そして東に向かい、波多を越えて南東に下って松坂辺りで一泊、中村川・金剛川・櫛田川を渡って斎宮（明和町）に伺い、それから伊勢宮に詣でたと推定される。

但し、当時はまだアマテラスも内宮も整えられていなかったはずである。従って、その前から斎宮として送られていた大来（大伯）皇女が仕えた神は丹波から迎えられた豊宇気毘売神（『記』）で、それを祀っていた宮は雄略期に創建されたと伝えられる現在の外宮だったとみなければならぬだろう。

神宮の形成や歌に詠まれた地名の疑義はともかくとして、第二十二番の歌調は、筆者の思い込みかもしれないが、皇女たちに対する気後れや遠慮はまったく感じられない。むしろ巫女の神託めいた言葉にも思われる。そして、その歌が明日にも斎宮に着ける日に詠まれたのなら、吹芟刀自の頭の中には、大来皇女の前の伊勢斎宮になった酔香手姫皇女が浮かんでいたように思われるのである。

なぜなら、用明天皇の娘だったその皇女は『記』では須賀志呂古郎女と、蘇我やすサノオに關係するとみられる須賀の文字で記されており、母は異説もあるが、葛城直磐村の娘の広子（『記』比呂）とされているからである。

酔香手姫皇女の祖父が磐村なら、大来皇女は天智天皇の孫娘である。磐群があえて磐村と書かれたとすれば、「河の上のゆつ（神聖な）磐村」にはそういった心情、また歌全体で大来皇女と大津皇子との関係を危惧する気持が込められていたのではないだろうか。

その歌が詠まれた年の関係者の年齢は、大来皇女は十五歳、六五三年生まれの十市皇女は二十三歳、のちに元明天皇になる阿閉皇女は十六歳だった。

これに対して、六三二年（頃）生まれと推定した額田姫王から想像すると、吹芟刀自は六一六年くらいの生まれだったと考えられる。従って、伊勢に詣でた年には六十歳くらいだったことになる。これは額田姫王が健康で長寿だったと推定されることにつながる。

第二十二番歌についてここで追記しておきたいのは、万葉学者だった伊藤博氏はくが『遊宴の花―額田王論―』（「萬葉」第八十二號 昭和四十八年八月）において、「この女性（吹芡戸自）は額田王と相似る面を持った歌人だったと考えるが」と、所感を述べておられることである。歌人の恐るべき感覚と感嘆せざるを得ない。

伊藤氏は同論においてそれとは別に、「額田をめぐって同母兄弟二人に恋愛葛藤の事件がくりひろげられたという証拠は、古代文献のどこにも指摘できなくなった。額田は天智の妻などではなかったのである」とも述べている。

これに対して本論筆者は、額田姫王は恐らく斉明天皇のお気に入りとしてまた身分的には女官たちのまとめ役の責任者として、同時にその裏では、天智天皇が大海人皇子の妻と娘（十市皇女）を質（人質）とするために、後宮に留まることを余儀なくされたのではないかと考えている。

歌には素人の筆者が感じるところ、伊藤氏の額田王の歌の解釈は的確であり、数々の指摘にも全面的に同意するものである。

観点を变えて鏡王とフキノトジの名称について見直してみると――、

鏡王の生育地は不明だが、「額田鏡王」の尊称を素直に眺めると、その額田が生育された氏族か場所を示しているように思われる。

管見にして額田鏡王の名をそのように解した論を目にしたことが無いが、「生育地または養育氏族名（額田）＋字あざな（鏡）・称号（王）」、つまり「押坂（忍坂）＋彦人＋大兄皇子」と同形の組合せと見れば、鏡王は額田部皇女・額田姫王と同様に、摂津の額田ではなく、額田郷で額田部連氏に育てられたと解釈できるのではないだろうか。

鏡王の父の阿方王の読みが確定していないが、筆者はこれをアカタではなくアガタノキミとして、平群縣あかたか額田縣と直接的な関係があったのではないかと想像している。

阿方王は、鏡王と押坂錦間皇女（推定）また吹黄刀自との婚姻、更に鏡王の扶養先を決めた重要人物だった。従って、阿方王は飛鳥に居住していたと推測され、鏡王の扶養先には飛鳥の北にあった額田部連氏の本拠地、平群の額田郷を選んだと考えるのが妥当だろう。飛鳥からわざわざ生駒山地から河内国を越して、摂津国の大都の難波の先になる額田を選んだとは考えにくい。

ここからも、鏡王の時代までに馬と鉄を通じて皇室とその祭祀に密接に関わって額田一



族の頂点に立った額田王（不詳の男王）の娘を鏡王が求めても何の不思議も無かった、とは言えるだろう。

そして本書では、その娘が恐らく長女だった吹黄戸自（吹芟刀自）であり、額田部家の財を受けて鏡王の居住地も民も管理監督したので戸自、刀自の尊称をつけて呼ばれた、とみている。

その「戸」が意味したのは、欽明朝以降に存在して「養老令」（七五七年施行）においては五十戸を一里さととした、課税基準と人民統制のために編み出された父系による地域集団の単位であり、戸主を中心とする家族や縁者だけでなくその住人や奴婢なども含んだ、およそ二百人の成人組織だったと理解される。

従って、刀自は単なる一家庭の高齢の女主人ではなく、豪族の王の家長的権威を受け継いだ娘だった。歴史学者の義江明子氏の表現（「刀自」からみた日本古代社会のジェンダー）を借りれば、「村の統率者としての刀自・家の経営者としての刀自」である。

そして、本書で吹黄戸自を額田部連氏の娘と見る理由は、フキの名前に製鉄との関連性が深く見られることである。

吹芟刀自はフキノトジと読まれ系図では吹黄戸自とされる。これは古語のフキが転じた植物のフキ（蔞）の変化と同じである。

「語源由来辞典」（ウェブサイト）によるフキの語源として、冬に黄色い花が咲くことから「フキ（冬黄）の中略で「フキ」になったとする説や、ふきの葉は大きく、少しの風でも揺れることから「ハフキ（葉吹き）」「フキ（風吹き）」の意味とする説などがあるとしている、つまり、フキノフキは黄、風、吹くとも切り離せない意味を持っていたとみなされる。

また、芟はミズブキ（水蔞）、スイレン科のオニバス（鬼蓮）のことだった。槍の穂先のような形の葉が鋭いとげに覆われていて、水面に伸びて広がった葉は時に二メートルを超すこともある。ここから、吹芟は肌に刺さるトゲのような飛沫を飛ばす溶けた鉄や銅、吹黄は吹子で風を送って高温になった金属の色と結びつけられそうである。

そして、「吹く」は氏数々の神名に付けられたタタラと直結する語であり、フキの茎もフイゴ（吹子・鞆）を連想させる。

但し、吹黄刀自について宝賀寿男氏からは、そこ（威奈郷）に額田王（額田姫王）の実家があったのではないかと述べておられる一方で、吹黄戸自は平群臣一族かと思われると

ころがある、平群臣一族に額田首があり額田部連の居住地が近い、また額田部連の系図も初期のものしか知れずで決め手がない、額田王はどちらの額田なのかわからない、とご教示戴いている。

武内宿禰を祖とする蘇我氏と同族の平群臣は、『紀』武烈即位前紀から海柘榴市つばいちにあった亭うまやたち（官馬の駅舎）の管理に従事していたことが確実である。海柘榴市には推古天皇の宮もあった。また平群氏の同族に馬の飼育・管理に従事した額田首がいた。

複雑な額田、額田部及び復姓に関して筆者に論じる余地は無い。また、吹黄戸自の出自を記した史料も無い。

しかし、吹黄戸自の名と製鉄との関連性は余りにも深いとみなされ、戸自とされたことから、短絡的かもしれないが、ここでは「吹黄戸自は平群の額田郷に居住した額田部連氏本家の長女で、額田郷で養育された鏡王との出会いから、摂津の威奈郷に戻った鏡王に求められて額田に移り、額田姫王をもうけた。額田姫王は摂津で生まれた」との仮説を提示しておきたい。

ここで、『万葉集』の歌をもう一首、六七八年四月に十市皇女が宮中で突然薨じたあとに、十市皇女との再婚を望んでいた高市皇子が詠んだ嘆きの歌とされる、巻二 第一五八番を加えておきたい。

山振之 立儀足 山清水 酌尔雖行 道之白鳴

（山吹の立ちよそひたる山清水汲みに行かめど道の知らなく）

まっ黄色な山吹の花々に彩られた山清水（泉）に水くみに行きたいのだが道が分からぬ（「万葉集ナビ」）

黄色の山吹に飾られた清水が湧き出る泉が黄泉（死者の国）を示していることは明らかに、生きている自分はその道を行く道を知らないからもう十市皇女に逢えないという嘆きが表現されている。

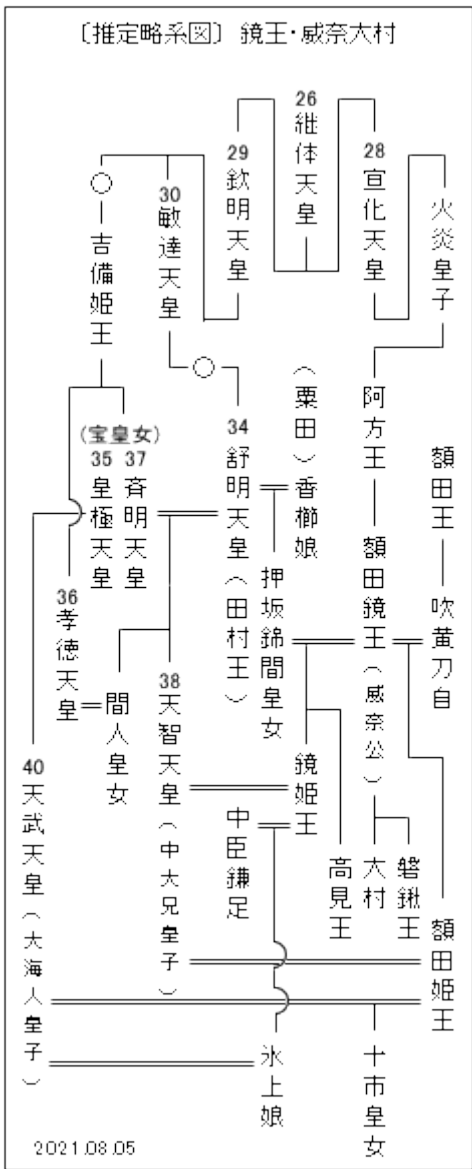
しかし、その歌の最初に詠み込まれた山振やまぶり（山吹）は黄色に直結する語で、春に黄金色に近い黄色の花をつける。黄色はまた溶けた鉄の色であり、高温で溶けた鉄の炎は古くから山吹色とも称されている。だから、その歌は最初に凜とした（儀）吹黄戸自を思い出させる意図をもって詠まれたのかもしれない。

山吹に守られる十市皇女と解釈すれば、吹黄刀自は十市皇女より少し先に死去していたと考えられるから、その享年は六十三歳くらいで、伊勢参りから三年くらいで死去したように思われる。

しかし、実際には高市皇子は吹黄刀自の墓所も、慕っていた異母姉の十市皇女が赤穂に葬られたことを知らなかったはずがない。十市皇女が吹黄刀自に導かれて伊勢の宮に詣でたことも知っていたはずである。

吹黄刀自も十市皇女も死して神になった、祖母は黄泉の国でも孫娘を守っている、その孫娘の夫を攻めるいくさを指揮したのは自分だから、自分が死んでも二人のもとには辿り着けないだろう、と筆者には感じられる歌である。

そこで、ここまでの考察と推理に基づいて作成した関係人物の推定系図は次のようになる。



ところで、『紀』には「赤穂」に葬られた女性が二人記されている。十市皇女と、鎌足と鏡姫王の娘で天皇の夫人になった氷上娘（六八二年薨去）である。

十市皇女は死後七日後、氷上娘は六日後に葬られており、二人共宮中で急死してから埋葬までの日数が極めて短い。流行り病があったのかもしれない。そして、当時には多くあることではあったが、夫々の母、額田姫王も鏡姫王も娘に先立たれるという逆縁の悲しみを味わったのである。

しかし、その「赤穂」の場所はどちらも特定されていない。

十市皇女の墓の有力な候補地として、奈良市高畑町の赤穂神社（『延喜式』「神名帳」赤穂明神）と同じ町内にあつて「高貴の姫の墓」と伝えられてきたとされる比売塚が有力視されているようだが、新薬師寺横の南都鏡神社の別社になっている。しかし、南都鏡神社

は藤原広嗣を祀る唐津市の鏡神社を勧請した藤原氏の氏神だったから、鏡王・威奈氏、額田部氏とは無関係である。

あくまで筆者の感覚だが、注目に値する別の遺跡がある。

桜井市慈恩寺にあつて朝倉富士とも呼ばれる外鎌山（旧名忍坂山）の西部から南部になる忍坂周辺は古墳や史跡の密集地帯で、その尾根の南端に八角墳の段ノ塚古墳（舒明天皇陵）と糠手姫皇女押坂墓、鏡女王忍坂墓等々がある。また外鎌山の南麓で東から西に流れる栗原川（おおばらがわ）の中ほどの南側に栗原寺（跡）があり、そこは額田姫王と関係が深い寺だった。

そして、段ノ塚古墳の北西、桜井市赤尾（あかお）から栗原川を渡つて数百メートル北に忍坂古墳群があつた。その内の四基が桜井市朝倉台2号公園に移されたのだが、七世紀後半から末頃に築かれたとされるその8号墳と9号墳の形状と構造に著しい特徴がある。

8号墳の墳丘は径約十二メートルの円墳だったと推定されるが、他に例の無い磚槨式横穴式石室と正六角形の玄室の組合せだった。磚槨式（磚積式）とはレンガ状（板状）に剥離する石を積み上げる工法で、そこで使われていた石はその辺りが特産の室生火山岩（通称榛原石、室生石）である。出土した歯は破損した小片で分析はできなかつたとのことである（桜井市教育委員会文化財課）。

六角墳は長野県、茨城県、千葉県にもあるようだが、8号墳以外に学術的に六角墳と認められたのは、マルコ山古墳（明日香村真弓。七世紀末〜8世紀初頭。切石で築かれた対角長約二十四メートルの不正六角墳。皇子が埋葬されたと推定される）と塩野六角古墳（姫路市安富町塩野。自然石で築かれた対角長七メートル前後の不正六角墳）だけである。

六角墳は大和地方では蘇我氏が主流にした方墳と舒明期〜文武期の天皇陵に採用された八角墳との中間形と捉えれば、皇族・豪族の首長級人物の埋葬墓と考えられる。

9号墳の規模・構造・石材は8号墳とほぼ同じだが、羨道の奥にある玄室の幅が長さを上回る長方形で、全体としてT字型をしている。そして、磚槨を用いたT字型の最大規模の墳墓が天理市の陵墓参考地、本論「(1) 舍人姫王⑦大俣王・茅渟王」の項において山田寺の伽藍配置との相似性から蘇我倉山田石川麻呂の改葬墓と推定した、帯解黄金塚古墳である。

磚槨式の工期は、岩を切り出して陵墓の形や規模に応じて加工する切石式より短期間で済む。そして、「乙巳の変」の秘密を知る石川麻呂が鎌足と中大兄皇子の陰謀によって攻め殺される（六四九年）前の石川麻呂は中大兄皇子の義父で右大臣という重責を担っていた。

磚槨式石室で帯解黄金塚古墳のおよそ半分の長さをもつ墳墓が花山西塚古墳（桜井市粟

原。七世紀後半頃。国史跡）である。被葬者・遺物は不明だが、磚槨式も皇族級墳墓だったと考えられるだろう。

また外鎌山の西麓、段ノ塚古墳の西北西に忍坂坐生根神社（式大大社）がある。元の祭神は生根神（薬草神或いは気生根すくなひこな＝清い水の神）だったと考えられるが、額田部湯連等の祖とされる少彦名神を祀っている。生根神社といえは摂津（大阪市住吉区）の生根神社が有名で、その祭神も少彦名神である。

ところが、本殿を持たずしろの磐座をご神体とする忍坂の生根神社に、生根薬とスクナヒコナを祀るように奏上したのが額田部氏だったのである（「大和志料 下巻」国立国会図書館デジタルコレクション）。

住吉と忍坂の生根神社のつながり、忍坂にも額田部の関係氏族が居住していたことから、現時点では忍坂8号墳の被葬者が十市皇女だった可能性はあると言えるのではないだろうか。

#### ④ 伊福吉部徳足比売臣

額田姫王の没年を考察する前に、額田姫王が生存中に死去した別の姫について述べておきたい。

それは江戸時代に鳥取県で出土し、東京国立博物館に所蔵（重要文化財）されている銅製の骨蔵器の蓋に彫られていた「伊福吉部徳足比賣臣いおきべのてこたりひめのおみ」である。その墓誌の文言は国文学研究資料館のサイト「皇漢」で公開されている。イオキベはイフキベとも読まれる。

神道には男神の比古神に対する女神の比売神があり、貴族や豪族の家で姫とか媛と呼ばれていたであろう貴婦人を女神に見立てた死後の追称・尊称が比賣・比売である。『紀』が記す推古天皇の諡号は豊御食炊屋姫尊で、『記』では豊御食炊屋比売命としており、名前の最後に付けられた尊や命が神を意味する尊称である。

生前徳足姫と呼ばれていたと思われる徳足比売は鳥取県東部、因幡国法美郡の伴造だった伊福吉部氏から文武天皇の後宮に出仕した采女で、文武天皇の慶雲四年（七〇七年六月二十三日以前）に従七位下を与えられ、その一年後、元明天皇の和銅元年に藤原京で没した。そして、その遺骸は国元に送られて三年後に火葬された。

しかし、朝廷に仕えず官職を持たなかった采女が存命中に「臣」だったとは認められず、采女が火葬され骨蔵器に入れられた他例も無い。

その銘文には別の注目点がある。――四位・五位の臣下や諸王の死を示す「卒」とされ

ていることである。それが従五位下であっても従七位下の四階級も上である。従って、卒も死に伴う追位があったことを示しており、これも極めて異例である。

「大宝令」の「後宮官員令」で規定された采女の条件は、郡司級の地方豪族の容姿の優れた姉妹か娘で、年齢は十三〜三十歳に制限されていた。そして、『続日本紀』は天皇即位（六九七年）後に母の藤原宮子（不比等の女）が夫人になり、石川刀子娘と紀竈門娘が嬪になったと記す。それは後宮の妻たちの序列が決められて後宮の体制が整えられたことを示すと捉えられる。

徳足比売がその年に後宮に献上されたとすると、六五四〜六七一年生まれだったこと、つまり三十七〜五十四歳だったことになり、その十年後の七〇七年に異例の叙位を受けた理由を想像できない。

しかも、七〇七年正月の朝賀の記事が欠けており、文武天皇はその年の六月十五日に崩御している。但し二月に昇進の叙位の一部が記されている。采女に対する特別の叙位が男性の宮人たちと同様に記録されたとも思えないが、その頃に行われた可能性が無いとは言い切れないだろう。

徳足比売の父を孝徳朝の六四六年に因幡国の評（郡）の督（長官）に任じられた伊福部臣都牟自（六五八年死去）とする説がある。この場合には都牟自の生年は遅くとも推古期の六二〇年以前と考えられて、徳足比売の生年は舒明期が濃厚になり、六四〇年を仮定すると七〇七年には六十八歳、六三〇年なら七十八歳になり、叙位の理由は更に想像困難である。

観点を變えて、徳足比売が文武天皇即位の際に十三歳で献上されたと想定すると六八五年生まれになり、天皇より二歳下だったことになる。

そうなると、七〇七年に二十三歳くらいであれば、文武天皇の子をなした褒賞として従七位下が叙位されて、翌年死して臣に相応しい卒去と扱われた、とみなすことができる。筆者が得心できる理由はこれしかない。

そしてここからは、年代的にも徳足比売の父を、宝賀寿男氏編纂の『古代氏族系譜集成』に示されている通り、都牟自の子で法美郡領<sup>ほうみ</sup>だった伊福部臣国足<sup>くにたり</sup>とみなすことが可能になる。

国足は『因幡国伊福部臣古志』（七八四年）に伊福部氏の第二十七代当主として「大乙上国足臣 従四位上左衛門督 文徳天皇 大宝年中」とある。藤原京の遺構と平安京から推測すれば、藤原京の伊福部門（西面の北門）警固の責任者だけでなく、従四位上左衛門

督として宮城の門を警固する左衛門府の長官だったことを示している。但し、その文徳天皇は古史料の文武天皇の誤写か誤記だと思われ、大乙上は都牟自に授けられた冠位で天武期に廃止されていたのでそれも誤りである。また、伊福部氏の始祖を大己貴命としていることに対しては、他系図との比較は筆者には困難である。

『古志』には疑問点が多いが、国足が宮城警備の責任者として適齢になった娘を後宮に差し出した背景は理解できる。そして、徳足比売が六〇六〜七〇七年に文武天皇の子か女をもうけていたとすれば、伊福部氏は皇親になっていたはずである。

しかし、大宝元年（七〇一年。『扶桑略紀』に拠れば二月四日）には文武天皇と藤原宮子（不比等の女）の間に首皇子おびと（のちの聖武天皇）が誕生しており、不比等は正三位大納言まで昇進していた。徳足比売が子女をもうけたとしても、不比等に不都合な記録が抹消或いは当初から採録されなかった可能性は十分に考えられるだろう。

骨蔵器の銘文は、徳足比売の死去から火葬までを「戊申秋七月一日卒也三年庚戌冬十月火葬即殯」、それに続いて「故處末代君等不應崩壞」、最後に銘文が彫られた日付「和銅三年十一月十三日巳未」がある。

先ず、死去から火葬まで三年三カ月かかった理由に、藤原京から平城京への遷都と先例のない采女の火葬があったことは否めないだろう。

我が国における火葬は、七〇〇年四月に僧道昭が遺言により初めて火葬に付され、その後貴人の火葬が広まり、同年四月から十一月の間に威奈大村、持統上皇は七〇二年十二月、文武天皇は七〇七年七月に火葬され、そして徳足比売が七一〇年十月と続くことになる。

そして、遷都は文武天皇存命時から計画されていたが、徳足比売が存命中に遷都の詔が出されて、死後に遷都がなされた。

文武天皇 七〇七年（慶雲四年）前半 徳足比売に対して従七位下を叙位

同年 七月 文武天皇崩御、火葬

元明天皇 七〇八年（和銅元年）二月 遷都の詔

同年 七月 徳足比売が死去

七一〇年（和銅三年）三月 平城京に遷都

同年 十月 徳足比売を因幡で火葬

同年 十一月十三日 骨蔵器を埋葬

従って、徳足比売の遺骸が平城京に移されたとは思えないので、七〇八年七月一日から

七一〇年二月の間に藤原京から日本海側の陸路或いは船で国元（鳥取市国府町）に送られたことが推定される。

そして、死から火葬まで三年三カ月もかかったことから、その火葬は遺体ではなく白骨が焼かれたと考えられ、それが国元で行われたことを示すのが「火葬即殯」である。これはまた、火葬のあとからすぐに殯が始められて、その間に恐らく因幡の製鉄氏族だった伊福部氏の一族によって骨蔵器が作られて、それを納める岩が加工されて、半月〜一カ月後に遺骨が骨蔵器に納められたものと考えられるのである。

鳥取県埋蔵文化財センターで開催された「鳥取まいぶん講座」（第4回）の資料『因幡の国府とその周辺』では、その「火葬即殯」を「火葬し即ちこの処に殯す」また「故處末代君等不應崩壞」を「故に末代の君等まさに崩壞すべきからず」と訳している。

銘文の起草者は記されていないが、その強い口調に感じられるのは僧が被葬者の成仏を願う言葉ではなく、火葬と殯をせざるをえなくなった徳足比売の死に対する憤りであり、国足が後世の者たちに対して下した命令だったように思われる。

ここから、平城京への遷都が終って一段落した国足が、娘の葬儀のために一時的に帰国した可能性が考えられる。

「文武紀」慶雲三年（七〇六年）二月十六日条に長上官（常勤の宮人）の転任・交代について「大宝令」の「選任令」を引いた詔が記されており、そこに六考（六年期限）を基準とする規定があり、二年毎の延長などが記されている。

そして、『古志』の記録が正しければ、国足の左衛門府督の就任は七〇一〜七〇三年であり、七一〇年まで督であれば六考に加えて一回以上の再任があったと推定される。従って七一〇年に督の任期を終えて帰国したと考えることもできるだろう。

いずれにしても徳足比売の火葬は国足の帰国を待って行われた、或いは国足が帰国するまで火葬は行われなかった、従って火葬の開始も埋葬も国足がその場所で命じたと考えられるので、それが遷都後七カ月目の火葬になった理由だと思われる。

この点からも、「骨蔵器」銘文は国足作と推測してもよいと考えられるのである。

「伊福吉部徳足比賣臣」の尊称は、文武天皇の寵愛を受けたであろう徳足姫に対して、文武天皇のあとを継いだ元明天皇が授けた諡号だったと思われる要素があり、これについては次の最終項をご参照戴きたい。

蛇足だが、伊福部連氏も製鉄氏族で、滋賀県の最高峰伊吹山を西北方向に遙拝する地（阜卓県不破郡垂井町岩手宇伊吹）に、美濃に居住した伊福吉部氏が氏神を祀ったと思われる



美濃国二の宮伊富岐神社がある。ウイキペディアに拠れば和銅六年には存在したとされており、祭神は気吹男彦の別名を持つ多多美彦命、山の傾斜を利用したたたら製鉄（野だら）を擬人化したとも考えられるヤマタノオロチ等を祭神にしている。

更に、伊富岐神社の東南東に製鉄の神、金山彦命を祀る美濃国一の宮南宮大社（垂井町岩手字伊吹宮代。重文）があり、金山祭（韃祭）が残っている。

従って、伊福吉・伊富岐は伊吹山や息吹と共に、タタラに関係した語だとみなされる。またウイキペディアによれば「伊福部の伴造氏は、臣や連のほか、君・公などがあり、一族には直・首姓のものも存在した」とあり、この内容は多種の姓を持っていた額田を冠する氏族も同じである。

それでは、徳足比売は文武天皇の子女をなしたのか――。

これに対しては、その可能性を推定し得る女が一人だけ存在する、というのが本書の答えである。

『延喜式』「巻第五（神祇五 齋宮）」に「未婚の内親王から選んで占え、内親王不在の場合には世代によって女王を定めて占え」といった意味の規則が記されている。

齋宮は皇室から伊勢神宮と賀茂神社だけに送られて神に仕える皇族の齋王の御所で、ここでは伊勢齋王について述べると、藤原氏が政権を、祭祀を中臣氏が牛耳るようになってからは、政権に影響を及ぼさないような皇親が選ばれたという実態があり、天皇の無病息災を祈る齋王は天皇が崩御するとその祈りが通じなかったとして退下するのが通例だったが、政変や政権の都合によって突然変えられることがあった。

文武朝になって慶雲三年（七〇六年）から齋王に送られたのは天武天皇皇女の田方皇女で、天皇崩御後に退下して結婚したものと思われる。

しかし、文武天皇の早世によって適齢の男性皇嗣が不在になり、天武・持統系王朝に危機が迫る中で、文武天皇の姉（氷高皇女）が七一五年に元正天皇として即位した。それを主導したのが藤原不比等であり、元正天皇即位の後で不比等が常に上位に置いてきた左大臣石上朝臣麻呂が薨じて、名実共に不比等が朝廷の頂点に立つことになった。

しかし、田方皇女が退下したあと、齋王の適任者も不在になった。終生独身だった元正天皇には皇女はいなかったし、早世した文武天皇に孫娘はまだ生まれていなかったからである。

その混乱期の七十七年に、『続日本紀』は「久勢女王を齋宮として伊勢大神宮に奉仕させ

た」(元正天皇の靈龜三年四月条)と記す。従って、久勢女王はその年に未婚、つまり十三歳未満だったものとみなせる。

このあと七二一年に齋王になったのは、五歳の井上女王(首皇子と縣犬養氏の女との間に生まれた女王)で、聖武天皇の即位によって井上内親王になったが、山部親王(のちの桓武天皇)の立太子に伴う政変によって薨じて、皇統は天智天皇系に戻ることになる。

久勢女王の系譜は一切不明だが、文武天皇と徳足比売との間に七〇六〜七〇七年に生まれたのであれば、七二七年に十歳か十一歳で、久勢内親王とされるべき尊称以外は、齋王としての資格は有していた。しかも、文武天皇ではなく天武天皇を基準にすれば、四世女王だったことになる。

そこには藤原氏による虚偽の記載や改竄とはいえない潤色という手法によって、伊福部氏を表に出さないための操作がなされたとみることができる。

また、久勢女王が齋王になった時に齋宮頭に任じられたのは、猪名真人のりまろ法麻呂(従五位下)で、前掲の『百家系図』でも『皇胤志』でも高見の子になっている。大紫を授けられた高見の子で宣化天皇六世、鏡姫王と額田姫王の甥でしかも六十歳近くだったと思われる法麻呂が従五位下に留められて齋宮に追いやられたことは、天武天皇と近しかった旧皇族の末裔だけでなく、天武天皇系だが持統天皇系でない王や女王が朝廷の中心から疎外されてゆく、流れの一端が見える人事と言えるだろう。

ここまでの帰納的な推理で得られた本項の推論は、「伊福部徳足姫は文武天皇の采女から側室になり、久勢内親王の母になって叙位を受けた。そしてその諡号は文武天皇の母だった元明天皇によって贈られた」ということである。

二十四年という短い生涯だったにもかかわらず出自を明かす伊福部の刻名を許され、臣としての卒去の葬儀を許され、また神格化された比売の諡号を贈られた理由は、そう考えなければ解けないからである。

そして、伊福部徳足比売と共に天武・持統・文武・元明期を生きたのが額田姫王である。

### ⑤ 比賣朝臣額田

額田姫王に長寿説が出される原因は二つある。

一つは持統天皇の吉野行幸に同行した時に、弓削皇子(天武天皇の第九皇子)が額田姫王に贈った歌(卷二第一一一番)である。

持統天皇の吉野行幸は六八九年から崩御する六九七年まで三十一回に及び、弓削皇子の存命中なので、それはいつの年か分からない。仮に最後の行幸の時だったとすれば、額田姫王は六十六歳だったことになり、同行してそこで歌を返している（一一二・一一三番）から、まだまだ元気だったと考えられる。

本項では個々の歌は示さないが、難解至極で読みと意味が定まらない巻一第九番を除いた他の十首からは、斉明天皇・天武天皇・持統天皇と一族に対する恩義に厚く、過激な或いは不本意な人生を強いられる皇族たちの近くにあつて、即興歌で遊べる才能を持った親しみやすい人柄だったことは想像できる。

そして、額田姫王の享年を推定させる史料の一つが談山神社所有の栗原寺の伏鉢（塔頂部の露盤上<sup>ろばん</sup>で相輪の下部に置かれた穴の開いた鉢状のもの）で、国宝に指定されて現在は奈良国立博物館に寄託されている。

その銘文の一部を私訳すると、以下のようになる。

「この栗原寺は仲臣朝臣大寫<sup>あそみおしま</sup>が持統天皇に願ひ出て草壁皇子を敬い伽藍の造営を請願した寺である。故に比賣朝臣額田<sup>ひめあそみぬかた</sup>がその一年後から和銅八年まで、二十二年をかけてこの地に伽藍を建て金堂を作り釈迦丈六尊像を鑄造して納めた。和銅八年四月にそれを敬い三重の宝塔と七科の宝と路盤を進上した。草壁皇子の神靈が菩提果を得て、先靈七世と共に彼岸に登ることを願ひ、大嶋大夫が仏果を得ることを願う」。

草壁皇子の薨年は六八九年四月で、その埋葬地を宮内庁は円墳の岡宮天皇真弓丘陵（奈良県高市郡高取町森）、としているが、史学会では出土した歯の分析などから真弓丘陵のすぐ北にある八角墳の束明神古墳（高市郡高取町佐田）と見る説が主流である。

しかし、栗原寺とその銘文の解釈に関しては多くの疑問点がある。

- (1) 草壁皇子が薨じて四年後によくやく寺の造営が始まったこと。
  - (2) 寺の造営に二十二年もかかったが完成しなかったこと。
  - (3) 造営に着手した比賣朝臣額田とは誰か。
  - (4) 誰が完成させたのか。
  - (5) 彼岸に昇られた七世先靈とは誰か。
- そこで、これらに対する本書の見解を簡単に記しておきたい。

(1 a) 比賣朝臣額田が栗原寺の造営に着手してから和銅八年（七一五年）まで二十二年かかったことから、着工は持統七年（六九三年）だったことになる。それは大嶋が草壁

皇子を祀る寺を造りたいと進言した年の一年後だから、進言は六九二年だったことになる。

草壁皇子を祀る寺を造りたいという神祇伯大嶋の申し出を母（持統天皇）も妻（阿閑皇女）も大いに喜んだはずで、拒絶したとは思えない。しかし、天皇と皇女が係わりとなれば国寺にしなければならぬが、当時朝廷の最大の課題は莫大な国費を伴う藤原京への遷都だった。その造営地の下見は六九〇年十月に再開されて、宮と新都の造営が進んでいた。

その計画と準備を取り仕切っていたと考えられるのは三十一歳で諸臣第十七位の直広肆になっていた藤原不比等で、従兄で直大肆の大嶋の一階級下まで昇進していた。そして、六九三年三月に大嶋が卒去して、その翌年末に遷都が行われた。しかも大嶋は明治初期まで続いた神祇伯の中で最下位（第十一位の直大弐）での死去であり、その冠位さえ追位だったように思われてくるのである。

この流れから想像するに、大嶋は元は遷都反対派で、草壁皇子の墓所の近くに菩提寺を建てることを進言したが、許可を留保されたのではないかと思われる。

そして、大嶋の死後に比売朝臣額田が大嶋も祀る寺にしたいと願い出たと思われるのだが、それは既に遷都を決めていた朝廷には、皇子と臣下を合祀する寺は国寺にできないという口実を与えることになり、私寺の造営は認めるが場所を藤原京の東方の山中に指定した、という経緯を生んだように考えられるのである。

これが大嶋の進言から造営着手までに四年かかった理由だったと理解できる。

（2a）持統天皇と阿閑皇女の祖父だった石川麻呂が平地に近い山を整地して作った山田寺の標高がおよそ120メートルで、六四一年の整地から金堂の建立まで二年かかっており、僧房の一部ができたのは更に五年後だった。

これと比べれば粟原寺は小規模だったと思われるが、その場所は標高約270メートルで藤原京より200メートル上になる。比売朝臣額田の私財の他に持統天皇と阿閑皇女の私的な援助があったとしても、竜門山塊北麓の樹木を伐採して資材を運び上げる道を作り、用地を平地にするだけで、最低でも数年を要したとみなさなければならぬ。

しかも、粟原寺建立の工事が始まって三年後、つまり建物の基礎も形もでき上がっていなかったと思われる時期に、天皇は不比等を重用することで文武天皇（草壁皇子と阿閑皇女の皇子）への譲位を敢行した（六九七年）。

そして、七〇〇年（文武四年）には、粟原寺との関係は不明だが、皇室の信奉も厚く当時一番の名僧と崇められて行基の師にもなった道昭和尚わじょうがわが国で初めて火葬されたのだが、遺言で指定したその場所は粟原だった。

その後持統上皇が七〇三年に崩御、その四年後に今度は文武天皇が病死して、その母だった阿閉皇女が元明天皇として即位することになった。しかも、すぐに藤原京は捨てられて平城京に遷都することになった。

このような皇室の変遷に伴う服喪や祝賀の期間、その間の都の移転などを差し引いて考えれば、工事開始から伽藍を配置して金堂と釈迦像を納めるまでにかかった二十二二年を、あながち長過ぎるとは言い切れないだろう。

（3a）官職を持たずに従七位下だった徳足比売に伊福部氏の姓だった「臣」の称号を追諡して、父の国足に「卒」の葬儀を行うことが許したのは元明天皇だったと推定される。

なぜなら、鎌足は天智天皇から藤原姓を授かり、不比等が文武天皇から不比等の一族だけを藤原姓として旧中臣の一族は中臣に戻されたことから分かる通り、姓は名家の出を示す標であり、その中から能力ある官人を選んで朝廷の組織を管理するために、改姓や賜姓は天皇の専権事項だったからである。

一方、和銅八年に完成した粟原寺は元明時代であり、女性の比売額田が朝臣だったとは考えられないので、それは近親者の姓であり、比売朝臣額田も元明天皇によって贈られた諡号だったと推測される。

そして、粟原寺の造営を願い出た人物が仲臣朝臣大寫（中臣朝臣大嶋）でその遺志を受け継いだのが比売朝臣額田だったから、大嶋の時代に額田の諱を持つ女性貴人では額田姫王しか知られていない。

額田姫王は、恐らく天武天皇の生前の命により天皇の崩御後に大嶋の妻に下ってその遺志を受け継いだので、比売の神格と大嶋の姓だった朝臣を追諡されたものと考えられるのである。

また、徳足比売臣から類推されるのは、存命中の額田姫王は天武天皇の初妻として徳足姫より上位に置かれたことはまちがいがなく、朝臣に相応しい「墓」の葬儀を元明天皇自ら行ったことが十分に示唆されている。そして、そうすることで、比売朝臣額田も「七世先霊」も大嶋も、自分の治世を助けてくれることを祈ったように思われる。

「比賣朝臣額田」は他の文献に無い名称だから額田姫王だと特定できない、また額田

姫王は朝臣でなかったから比売朝臣額田を額田姫王とすることはできない、というのが史学会の慎重な意見のようである。しかし、それらは比売朝臣額田を存命中の尊称と付会した解釈だろう。

しかし、比売朝臣額田の比売も朝臣は死後の贈位とみなされるので、額田が諱或いは字あひなに基づくとみられる。従って、比売朝臣額田は姫君額田、姫王額田と見ることができ。戒名（宗派によって呼び名は異なる）に実名の一部を入れるのは現代も続けられていることである。

この点からも、比売朝臣額田に比定し得る人物は額田姫王以外にいない。

そして、銘文が示唆するのは、額田姫王の死去が和銅八年であり四月以前だから、その時期は七一五年一月～三月の間だったことになる。

額田王の享年について、伏鉢に残された和銅八年を額田王（額田姫王）の没年とみなして、民俗学者・歌人だった折口信夫氏は七十九歳以上とみて（折口信夫全集 第九巻（国文学篇3収 録『額田女王』）、梅原猛氏は八十三歳説を打ち出した（『塔』（下）「額田王の生涯」）。

また伊藤博氏は額田王を「一八、九歳の大化四（六八四）年」（『遊宴の花―額田王論―』）としているので生年を六三〇～六三二年とみていたことが窺える。従って、没年が七一五年であれば八十五、六での享年になる。

偉大な先学の方々との数年の誤差にこだわるつもりは無いが、本論においては額田姫王の生年を既に六三二年と推定したので、享年八十四歳だったという結論になる。

額田姫王の長寿が推定される背景として、元明期頃に長生する者が増えていた状況が窺える。「元明紀」に百歳以上の者に二斛さか（二石。二十斗）を与えたり、三つ子を生んだ民も散見される。戦乱が収まって戸籍が強化されて米の税収が増えて、それを時には民への褒賞に与えられて、三つ子の出産に耐えた女性もいたということである。

飛鳥・奈良時代の平均寿命が二十八～三十歳ともされる（『寿命凶鑑』）こともあり、額田姫王以前の姫王と関係人物に対しては八十歳以上の享年を疑問視してきたが、百歳を全うしたとされる神功皇后は別にして、実在した女帝の享年と比較すると、推古天皇七十五歳が最長で、斉明天皇五十六歳（本論推定）、持統天皇五十九歳に対して元明天皇六十一歳、山背姫王と推定した山形女王七十三歳、元正天皇六十九歳であり、額田姫王が舒明期から元明期まで生き抜いてきたことを否定することはできないだろう。

粟原寺の造営過程の考察を付け加えておくと、伏鉢では（元明天皇が）和銅八年四月に三重の宝塔と七科の宝と路盤を進上して、寺の造営が終わったことを示している。

三重塔の塔身上部に路盤を据え付け、そこに墓を意味する銘文を彫った伏鉢（覆鉢）をかぶせて、その穴に九輪・水煙・宝珠も備えていたであろう相輪上部をはめ込んで塔が完工する。

そして、『上宮聖徳法王帝説』の裏書によれば、山田寺の伽藍造営は「始平地」から金堂完成まで二年←僧房完成まで五年（←中断十四年）←塔の心柱を立ててから完成まで三年←丈六仏の鑄造から開眼まで七年、と進んでいる。造営中断から二十四年後、六七年（天武五年）に塔を完成させて「浄土寺」の法号を与えたのは、額田姫王の夫であり元明天皇の義父だった天武天皇だった（「癸酉年十二月十六日建塔心柱其柱礎中作円穴刻浄土寺」）。

一方、粟原寺は額田姫王が没してからわずか数カ月で塔が完成しているから、額田姫王の死去時に塔の下部（屋根から下の塔身）は完成寸前で伏鉢を含む金属製の相輪部分もでき上っていた、とみなさなければならぬだろう。そうでなければ、塔身の建造、相輪の製作と設置、塔から足場や梯子を外して寺の全域を整理して天皇列席の葬儀に間に合うことはできなかつたと考えられる。

しかし、額田姫王が死の寸前まで寺の造営に立ち会えたとも思えないので、金堂への仏像の安置はその遺言に従って行われた可能性は考えられる。

しかしそれと共に、火葬が行われたかどうか不明だが、額田姫王が没してすぐに元明天皇が葬儀と埋骨を終える前に諡号を与えたとは考えにくく、その一方で、元明天皇がたびたび建造中の粟原寺を訪れたとも思えない地理的状況がある。

粟原寺は標高およそ270メートルの高台にあるから近づくにつれて急な上り坂になるがそれは省いて、徒歩の距離では藤原宮から10キロメートル弱、つまり女帝が輿に揺られておよそ二時間で行けるが、平城京からはその三倍くらいあるから歩き続けて六時間を要したはずである。従って、葬儀に向かう天皇の旅に平城京からの日帰りは考えられない。

『続日本紀』によれば四月二十五日に叙位が行われている。元明天皇はその後、四月末日までの間に氷高皇女の他に重臣たち、そして次期天皇に忠誠を誓わせるためにもそれらの臣も伴って粟原寺に赴いたと思われるので、一行は粟原寺ではなく旧都で一泊し

て、粟原寺で塔を見上げて落成法要を行ない、祈りを捧げたものと考えられる。

(4a) 伏鉢に刻める銘文の文字数は制限されるのに、その百七十二文字の内に「敬」と「和銅八年」が前段と後段に一回ずつ使われている。どちらも記す必要があつて省くことができなかったのは、前段と後段の意味が違ふからである。

紙幅の都合でここに原文を示していないが、銘文の構成は、文頭から「日並御宇東宮敬造伽藍之尔」までは草壁皇子を敬つた大嶋の粟原寺造営の「發願説明」であり、それに続く「故比売朝臣額田以甲午年始至於和銅八年」から「釈迦丈六尊像」まで伽藍の造営を続けた比売朝臣額田の「造営説明」である。これが前段である。

それに続く後段、「和銅八年四月敬以進上於三重寶塔 七科鑪盤ろばん矣 仰願藉此功德」から最後までは、比売朝臣額田に対する寺の「完成報告」と草壁皇子等に対する「冥福祈願」である。

その後段には主語が記されていないが、塔を仰いで、寺の造営と完成させた人物の功德によつて皆が成仏することを願つた人物は、時の天皇元明以外ではあり得ない。

なぜなら、和銅八年(七一五年)は元明天皇が天皇として最後の年で、寺が完成した五ヶ月後の九月からはその娘、元正天皇げんしょう(文武天皇の姉。氷高皇女)の世になつて元号は靈龜に変わることが決まっていたからである。

従つて、その前段から後段への流れは、「粟原寺の造営に没頭したが塔を見ることなく和銅八年に他界した比売朝臣額田に対して、それを敬つた元明天皇は和銅八年四月に寺を完成させたことを報告して、寺を造つたのは額田姫王と自分であると強く訴えた」と読むことができる。

そして、そこに示唆されるのは、元明天皇の終生の思い出になつたであろう伊勢に行した吹黄戸自を通じてだけでなく、母親世代の比売朝臣額田との間に直接に親密な関係があつたことである。

その理由の一つとして推測できるのは、山田寺との関連である。

山田寺は元明天皇と持統天皇の祖父だつた、蘇我倉山田が整地から造営を始めて金堂まで完成したが、塔は上げられずに寺は未完成で終つた。

しかも、石川麻呂は甥の讒言によつて謀反の罪を着せられて金堂で自殺、自殺後に斬首されて死体を太刀で刺し貫かれるという屈辱を与えられた。その時に石川麻呂の裳に服していた額田部湯坐連など十四人が「戮り」で処刑されて九人が絞首された。殺戮など



で用いられる戮は死ぬまで殺してはすかしめるという意味で、そこでの被害者に額田姫王の縁者や知人が含まれていた可能性は十分に考えられる。

しかも、その陰謀の主役で石川麻呂に兵を差し向けたのが、元明天皇の父だった中大兄皇子であり、石川麻呂がそれを察していたことは想像に難くない。

ちなみに、「史跡栗原寺址」の石碑の側に「当地には万葉の女流 額田王終焉の地だという伝承が遺されている」旨の説明版がある。

それが事実だったかどうか、額田姫王は平城京に行かなかったのか行けなかったのか、その間の事情は不明だが、元明天皇には山田寺と同じ形で塔の造営が中断した栗原寺に対する想いが強く働いて、奇妙な因縁に不安を感じたのかもしれない。そのために、急いで、天皇が代替わりする前に寺を完成させたように思われるのである。

栗原寺には謀反も罪人も関係が無いと思われるが、大嶋が草壁皇子を祀る国寺←その遺志を継いだ比売朝臣額田が草壁皇子と大嶋を祀る私寺←比売朝臣額田の想いを継いだ元明天皇が草壁皇子・大嶋と比売朝臣額田を祀る私寺に、質的に変化したともみなされるのである。

しかし、このあと起こる天武系王朝の衰退と平安京への遷都によって飛鳥京も藤原京も捨てられて、栗原寺三重塔伏鉢が談山神社（多武峰寺）に、山田寺の仏頭が興福寺に、恐らく木材と共に持ち去られて、元明天皇にまつわる両寺が消え去ったのだろう。

(5a) 祭神に対する願文がんもんの最初は「皇太子の神霊、速やかに菩提の果を証せんことを」で、そのあとに「願わくは七世の先霊が彼岸に登らんことを、願わくは大嶋太夫が必ず仏果を得んことを」と続く（訓読みは談山神社の展示に拠る）。

その「七世先霊」を元明天皇に先立った七代の天皇の御霊として、孝徳天皇・斉明天皇・天智天皇・大友皇子（『懷風藻』天皇になったと記される）・天武天皇・持統天皇・文武天皇と解することができるかもしれない。

しかし、七世先霊は主祭神皇太子の後で臣下大嶋の上にあるから、それは夫より先に死去した元明天皇と親しかった皇族を示していたとみるのが妥当だと思われる。

しかし、孝徳天皇の崩御は六五四年、斉明天皇の崩御は六六一年で同年に元明天皇が生まれている。つまり、元明天皇は孝徳天皇と斉明天皇とは面識が無い。

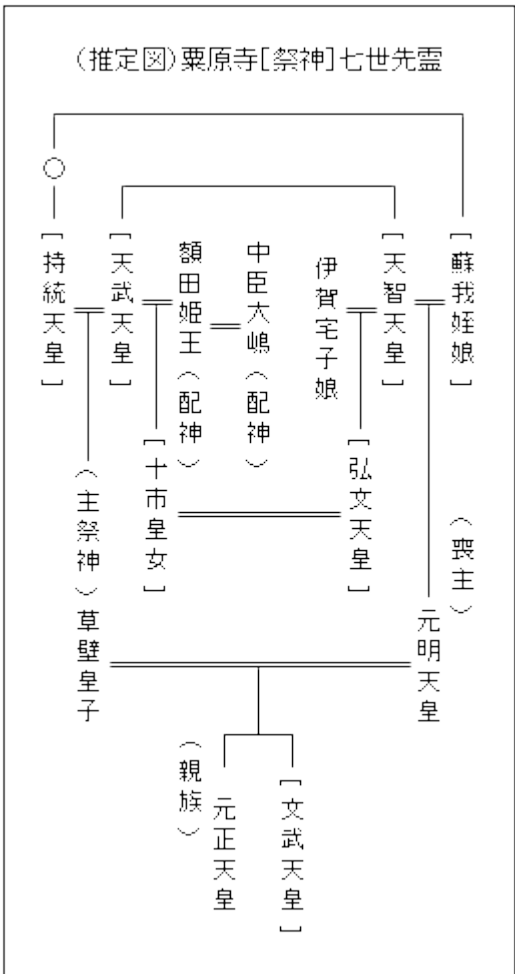
また、寺に霊を祀ることに疑問を持つ人がいるかもしれないが、仏教各派の現代の解釈は別にして、聖徳太子が開いた寺や四国八十八カ所の寺を霊場と称し、祖霊を迎える

儀式だったお盆（盂蘭盆会）等は違和感なく引き継がれており、古代においては寺・仏と霊は敵対するものではなく、人は死後に霊となって、それから菩提（悟り）を得て仏になるという思想があった。

日本最古の仏教説話集と総括されるのが『日本霊異記』（日本国現報善悪霊異記）であり、また、以下は孫引きで恐縮だが、仏教学者村上保壽氏むらかみやすとしの論文「空海の十住心思想と六道輪廻」の文頭に、同氏著の『密教の霊と救済』（高野山出版所）を参照して「空海の『性霊集』の中に、亡き人のために追善供養する忌日の願文がある。その内容は死者の霊の救済を祈願するものである」との記載がある。

粟原寺は歴代天皇の菩提寺ではなく、元明天皇が祀るべき霊を祀る寺になり、功績を称えられて神の諡号を贈られた額田姫王の霊は既に祀られたとみなせば、その七世先霊は元明天皇の父・母・兄・子、夫の父・母・娘の視点――、天智天皇・姪娘（桜井娘）・大友皇子（弘文天皇）・文武天皇、天武天皇・持統天皇・十市皇女で捉えることも可能であり、七世先霊から実母を外すことには抵抗を感じる。

また、斉明天皇には川原寺が創られており、祖父の石川麻呂が造営を図ったが未完で終わった山田寺は天武天皇によって完成されて浄土寺の法号を授かったので、石川麻呂の菩提はそこで弔われるとみることができ。従って、元明天皇は粟原寺がそのような二大寺と比べられることを避けて、祖父を祭神に入れなかったように思われるのである。



⑥額田部王と額田部姫王・額田王

『統紀』和銅五年（元明天皇の七一二年）正月十九日条に、三名が無位から従四位下に、別の三名が無位から従五位下に叙されている。新しく貴族に列せられた者たちである。

無位（无位）とは宮で仕事はあるが位階を有しない者で、無位から従四位下になれるのは親王の子、従五位下になれるのは諸王の子という制限があり、従五位下を授けられた人物に額田部王・孝志王・田中王が挙げられている。そして、名を列挙されての叙位は、死去に伴う追位や追諡でなく、存命中の人物に対する処遇だったことを示している。

孝志王は孝志姫王（「第一章」（5））を養育した孝志君の子孫の男王とみなされ、田中王は蘇我一族の田中朝臣（男王）で「壬申の乱」大海人皇子に従った田中足麻呂の血筋かと思われるが不詳であり、額田部王はまったく不詳とされている。

額田一族では同日に、正六位下から従五位下に昇進してのちに河内国河内郡擬大領（臨時の国司）に任じられた額田首人足（みかろおびととたり）（額田八国の子）が記されている。

古来額田部氏を束ねてきたのは男性の額田部王だったと考えられ一方で、額田を冠する一族では出雲系の額田部臣、平群の額田首等が知られているが、姓を整理し直した「八色の姓」では額田部連が第三位の額田部宿禰に挙げられただけで、臣から選別された朝臣に額田部臣は含まれていない。この点からも、額田一族は時の天皇と直接血縁関係を持たない特殊な豪族としての一定の評価と信頼を得ていたように思われる。

それまで額田部王の名で官位（官職と位階）を与えられた人物はいないので、和銅五年に突然登用されたのが額田部氏の領袖だった男王であれば、これは不詳である。

話が代るようだが、草壁皇子が二十八歳、文武天皇が二十五歳で早世したことが影響したのか、その後発生時期は不明だが、元明期には一部の皇族の間で四十歳から十歳ごとに長寿を祝う儀礼が行われていた。四十歳が初老の入り口と考えられていたことが窺える。

ウイキペディア「賀の祝い」の項に、「賀の祝いの初期の例として、『懐風藻』には「長屋王の四十賀（715年）を祝したと思しき詩賦が残っている」とある。この詩（左大臣正二位長屋王三首 五言 元日宴 應詔」の一首）の転記は省くが、七一五年を四十歳と見ているのは、同書に記される「年五十四歳」から生年を六五九年と解しているからで、それは本論（「第一章 山背姫王 ③」）で六五九年説に立つことを述べたことに合致する。

また、『源氏物語』第三十四帖「若菜上」において、十月に光源氏の四十賀が盛大に行われた話を取り込まれている。

そして、本論で七〇三年生まれと推定した額田姫王は、七一二年に八〇歳だったことになる。

従って、その年正月の額田部王に対する叙位は、元明天皇による古来稀な傘寿になった

無位の額田姫王に対する祝賀と捉えることができる。

「天武紀」において額田姫王は妃・皇子・皇女の後に記されており、死亡時まで位階を記されていない。しかし、額田姫王は無位から従五位下を授けられる条件の「諸王の子」を満たしていた。舒明天皇の義理の孫娘という身分だけでなく、宣化天皇四世鏡王の女の五世女王だったからである。

その叙位はまた、従七位下で四年前に死去した自分の息子の妻（徳足姫）より額田姫王の方が上位であることを皆に認めさせる儀式になったと思われる。また、死後に比売朝臣額田の諡号を贈ることによって、従五位下より四階級上になる朝臣相応の従三位の薨去として扱い、元明天皇が参列する葬儀と埋葬の理由付けにもなったと思われる。

しかし、男性の功臣に対して死後の追位が行われても一ないし二階級上が通例だったから、伊福部徳足比売臣も比売朝臣額田も極めて異例の扱いを受けている。それが伊福部徳足比売臣に久勢皇女（久勢女王）を想定せざるを得ない理由であり、直接血縁関係が無かったが天武天皇家・額田姫王家との家族ぐるみの密接な交流である。

そして、本論におけるこれらの新しい考察は、晩年が不明の額田姫王が七一二年までは存命だったことを示す新しい論拠になり、推定没年七一五年の傍証になり得るものと考えている。

更に、和銅五年の「額田部王」が『薬師寺縁起』の「額田部姫王」、また『万葉集』「額田王」の出所ではないかと考えていることを付け加えておきたい。

本論の最後に、既に気が付かれたと思うが、個々の姫王と関係する人物に対する考察から、姫王の身分について共通する要素が抽出されている。それは姫王自身か夫の祖父、或いは父か母かの父が天皇であり、姫王が天皇三世になることである。

しかし、鏡王の王女だった額田姫王だけは義理の関係から舒明天皇三世になる。これが額田姫王の特殊性であると指摘しておきたい。

「姫王」関係人物推定年齢表

姫王	*印は本誌推定	享年	550	600	650	700	750
宣化天皇	*481~	539	59				
欽明天皇	*523~	571	49				
聖德太子	*525~	580	56				
敏達天皇	538~	585	48				
用明天皇(大兄皇子)	*547~	587	41				
推古天皇(額田部皇女)	554~	628	75				
桜井皇子	*555~	*587	33				
押坂彦人大兄皇子	*555~	593	39				
穴穂部間人皇女	*559~	622	64				
舍人皇女	*571~	*575	5				
藤手姫皇女	*572~	*624	53				
厩戸皇子(聖徳太子)	574~	622	49				
1 舍人姫王	*580~	603	24				
蘇我蝦夷	*586~	645	66				
2 吉備姫王	*588~	643	56				
舒明天皇(田村皇子)	593~	641	49				
皇極・斉明大王(宝皇女)	*606~	661	56				
押坂鎌間皇女	*610~						
3 上宮大娘姫王(春米女王)	*610~	643	34				
(額田)鏡王	*614~	*662	49				
古人大兄皇子	*614~	645	32				
吹貴刀自(吹茂刀自)	*616~	*678	63				
天武天皇(大海人皇子)	*622~	686	65				
車持与志古娘	*624~	*659	36				
天智天皇(葛城皇子・中大兄皇子)	626~	672	47				
7 鏡姫王(鏡王女)	*628~	683	56				
牟那公高見	*630~	*672	43				
4 倭姫王	*631~	*687	57				
8 額田姫王(額田王)	*633~	*715	83				
持統天皇(額野讃良皇女)	645~	703	59				
大友皇子(弘文天皇)	648~	672	25				
元明天皇(安陪皇女)	661~	721	61				
5 菴志姫王	*663~	*702	40				
6 山背姫王(山形女王?)	*674~	*745	72				
20221002 rev. by N. Igarashi			550	600	650	700	750

2022 (令和4) . 10 . 02 完

禁無断転載

【参考文献】(順不動)

- 『日本書紀 下』井上光貞監訳(昭和63年 中央公論社)  
『古事記・日本書紀』福永武彦訳(昭和52年 河出書房新社)  
『續群書類従 第二十九輯 下 雑部』(昭和34年 續群書類従完成會)  
『続日本紀(上・中・下) 全現代語訳』宇治谷孟(1996年 講談社)  
『古代氏族系譜集成』宝賀寿男(1986年 古代氏族研究会)  
『百家系図』(抜粹)(国立国会図書館複写)  
『皇胤志 第二卷』(木村信行 訳並びに校訂)(抜粹)(国立国会図書館複写)  
『懷風藻』江口孝夫(2000年 講談社学術文庫)  
『蘇我氏』権勢を誇った謎多き古代大族 宝賀寿男(2019年 星雲社)  
『大鏡 全現代語訳』保坂弘司(1981年 講談社学術文庫)  
『神々の流竄』梅原猛(昭和60年 集英社)  
『藤原不比等』高島正人(平成9年 吉川弘文館)  
『万葉秀歌』(上・下) 斎藤茂吉(1968年 岩波書店)  
『額田王』直木 孝次郎(2007年 吉川弘文館)  
『逆説の日本史2 古代怨霊編』井沢元彦(1994年 小学館)

【インターネット資料】(順不動)

- 『現代語訳古事記』国立国会図書館デジタルコレクション  
『本朝皇胤紹運録』国立国会図書館デジタルコレクション  
『本朝皇胤紹運録』洞院満季編 早稲田大学図書館(日本古典籍データ)  
『本朝皇胤紹運録』国文学研究資料館  
『続日本紀』(朝日新聞社) 朝日新聞社  
『神皇正統記』国立国会図書館デジタルコレクション  
『新編纂図本朝尊卑分脈系譜雑類要集』藤原公定 撰 吉川弘文館(国立国会図書館デジタルコレクション)  
『新撰姓氏録』国立国会図書館デジタルコレクション  
『姓氏家系大辞典 太田亮著 上田萬年・三上参次監修 姓氏家系大辞典刊行會版』  
(第2巻・第3巻・第4巻 国立国会図書館デジタルコレクション)  
『大日本仏教全書 多武峰縁起』(国立国会図書館デジタルコレクション)  
『藤氏家伝』(古典研究サイト 埋もれ木 上代古典集)  
『藤原麻呂の前半生について―長屋王の変前夜まで―』木本 好信(甲子園短期大学紀要 No.28 (2010))  
『増補 六國史 卷五』佐伯有義校訂標注 朝日新聞社蔵版(国立国会図書館デジタルコレクション)  
『延喜式』 新日本古典籍総合データベース(巻第五 神祇五 斎宮) 国文学研究資料館(178頁)  
『延喜式 卷第二十一』e 國寶(国立文化財機構所蔵)  
『延喜諸陵寮式』宮内庁書陵部

- 「一代要記」国文学研究資料館
- 「扶桑略記」国文学研究資料館
- 「扶桑略記」国立国会図書館デジタルコレクション(国史大系 第6巻 扶桑略紀) 第五 五  
一八頁天智天皇、五百二十三頁 天武天皇)
- 「万葉集 西本願寺本 巻1」国立国会図書館デジタルコレクション(コマ5・6)
- 「先代旧事本紀 10巻・[5]」国立国会図書館デジタルコレクション
- 「元暦校本万葉集 巻一(古河本)」e國寶(国立文化財機構所蔵)
- 「懐風藻」(新潟大学付属図書館版)国文学研究資料館 三十七頁)
- 「古事類苑データベース」国文学研究資料館
- 「(論説) 殯の基礎的考察」和田 萃(京都市学術情報リポジトリ)
- 「古代王権と官僚制」仁藤敦史著(臨川書店刊)
- 「皇親女子と臣下の婚姻史 ―藤原良房と潔姫の結婚の意義の理解のために―」栗原 弘  
(名古屋文理大学紀要 第2号(2002))
- 「平城宮跡資料館」2020年秋期特別展 「地下の正倉院展―重要文化財 長屋王木簡―  
第1期〜第3期 木簡解説シート
- 「長屋王家木簡再考」森 公章(弘前大学学術情報リポジトリ 1994-03-30)
- 「長屋王家木簡」にみえる家政機関について」長谷川 綾子(法政大学学術情報リポジトリ)
- 「社会実情データ図録←日本人の寿命の変遷(「寿命図鑑」2016年いろは出版引用)
- 「古代日本における福祉の考え方 ―養老令における救済に関する規定を通して―」松山郁夫
- 「古典研究サイト 埋れ木」(上代古典集) 田中 孝顕
- 「古代史癡祭 列島編」(上宮聖徳法王帝説・上宮聖徳太子傳補闕記)
- 「日本書紀の漢字類義語に関する研究 ―尊称を中心に―」朴 美賢
- 「皇漢/金石文字墨帖一覽」(弘前市立弘前図書館所蔵) 国文学研究館
- 「継体天皇と河内馬飼首荒籠」井上満郎(京都府埋蔵文化財調査研究センター)
- 「山田寺発掘調査報告(図版編)」奈良文化財研究所学報第63冊
- 「帯解黄金塚古墳 現地説明会資料」奈良市教育委員会 奈良市埋蔵文化財調査センター
- 「皇極(斉明)天皇の出自をめぐって」神崎 勝(立命館大学)
- 「野中寺弥勒像」の年代について」大山誠一(弘前大学学術情報リポジトリ)
- 「中天皇をめぐる諸問題」田中卓(日本学士院紀要 第九巻 第二号)
- 「法隆寺献納金銅仏 丙寅年銘菩薩半跏像について」高橋平明(奈良大学リポジトリ)
- 「興福寺縁起」(「興福寺縁起草」)早稻田大学図書館
- 「平野塚穴山古墳 奈良県歴史文化資源データベース」奈良県 地域振興部 文化資源活用課
- 「史跡平野塚穴山古墳の発掘調査の概要について」史跡平野塚穴山古墳現地公開資料  
令和元年6月30日(日) 香芝市教育委員会事務局生涯学習課
- 「平野塚穴山古墳の謎―被葬者は茅渟王か―」塚口義信 香芝市
- 「藤ノ木古墳と古代の河内」文化財講座記録集3「財八尾市文化財調査研究会報告30  
(奈良県教育委員会 泉森 皎)
- 「山田寺発掘調査報告(図版編)」奈良文化財研究所学報第63冊
- 「第二章 山田寺の沿革」寺崎保広 奈良文化財研究所学術情報リポジトリ

- 「帯解黄金塚古墳 現地説明会資料」奈良市教育委員会 奈良市埋蔵文化財調査センター
- 「房総・弘文天皇伝説の研究」井上 孝夫 千葉大学教育学部
- 千葉大学教育学部研究紀要 第52巻171～178頁(2004)
- 「粟鹿大明神元記(豎系図・和銅元年)」宮内庁書陵部
- 「官制大観 律令官制下の官職に関わるリファレンスNo.8」(現代語訳「養老令」) Min Shig
- 「遊宴の花―額田王論―」伊藤 博(萬葉学会 学会誌『萬葉』アーカイブ 第八十二號)
- 「研究 額田王に関する一考察」有村 和子
- 「額田王の経歴と蒲生野贈答歌」寺川眞知夫
- 「額田部氏の研究 畿内中小豪族の歴史」森 公章(国立歴史民俗博物館研究報告 第88集)
- 「額田部氏の系譜と職掌」仁藤敦史(国立歴史民俗博物館研究報告 第88集)
- 「万葉集ナビ」
- 「やまとうた」▽ 訓読万葉集」水垣 久
- 「本居宣長の大和 ―『菅笠日記』と『古事記伝』(ブレ万葉の旅として)― 橋本 雅之  
(奈良県立 万葉文化館←万葉古代学←万葉古代学研究年報)
- 「古樹紀之房間」(古代氏族研究会公認HP)
- 「語源由来辞典」
- 「古代の鉄生産について ―美濃・金生山の鉄をめぐる―」八賀 晋
- 「古代の鉄の生産・流通操業開始年代の検討―」丸山竜平
- 「藤原不比等研究序説」横田 健一
- 「大刀自」論から見た元明即位の一要因」池上 みゆき(佛教学大学院紀要 第三四号  
(二〇〇六年三月)
- 「刀自」から見た日本古代社会のジェンダー ―村と宮廷における婚姻・経営・政治的地位―」義江明子(帝京史学26号)
- 「apedia web版尼崎地域史辞典」尼崎市立歴史博物館(地域研究史料室)
- 「若王寺遺跡」兵庫県文化財調査報告第305冊 兵庫県教育委員会(奈良文化財研究所)
- 「威奈大村骨蔵器銘文」尼崎市立歴史博物館(地域研究史料室)
- 「因幡国伊福部臣古志」九州大学日本史学研究室
- 「『因幡』の国府とその周辺」久保穰二朗(令和三年度 鳥取まいぶん講座(第4回))
- 「〈研究ノート〉伊勢斎宮の選定に関する小考」板倉則衣
- 「空海の十住心思想と六道輪廻」村上保壽(J・Stage)
- 「日本古代の貴族」朧谷 寿
- 「奈良・平安初期における二世王の存在形態―その蔭位・昇叙・任官・賜姓について―」石田 敏紀
- 「奈良県 桜井市観光協会公式ホームページ」▽忍坂街道周辺」一般社団法人桜井観光協会
- 「奈良・桜井の歴史と社会」▽ うましうるわし奈良 談山神社」(excite blog)
- 「ネイチャーなら・第146号(12)」額田王の晩年を想う」奈良人と自然の会
- 「天武天皇の年齢研究」神谷 政行
- 「殯の歴史的展開 ―七世紀を中心に―」小倉久美子(万葉古代学研究年報第14号)
- 奈良県立万葉文化館



「和暦（わがよみ）」と中華歴（からがよみ）」  
「Wikipedia」 日本語版（多数ページ）  
「Google Map」  
「地理院地図（電子国土Web）」 国土地理院

※表紙用画像として、

（1）山吹のイラストは SeesaaBLOG > 庭園素材（フリーイラスト素材集）> 山吹  
(<http://sozai.shu.seesaa.net/article/147074512.html>)

（2）銅鏡の画像は Wikipedia 銅鏡 > 鳥居坂古墳出土「赤鳥元年」銘鏡（重要文化財）  
(Saigen Jiro)

を加工して使わせて戴きました。ご提供者の方々にご報告かたがた厚く御礼申し上げます。